
2010年 ひかりと昴（2012年愛と光へ 番外編）

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2010年 ひかりと昴（2012年愛と光へ 番外編）

【Nコード】

N9270K

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

「2012年 愛と光へ」の番外編です。

昴とひかりが一緒に暮らしてしばらくしての、二人の様子を描きました。

本編とあわせて、お楽しみください^^

1 昴くんと暮らし

昴くんと二人で暮らしてから、8ヶ月以上が過ぎた。季節は秋へと移り変わっている。私の小説が映画化され、公開してから、もう2ヶ月が経つ。映画は大ヒットした。

今回は、菅原エリカと、昴くんの恋のうわさも立つこともなく、私と昴くんが一緒に暮らしているのも今まではれることもなく、平安で穏やかな日が続いている。

「2012年 愛と光の地球」も出版され、これまたベストセラーになった。

私は、ペンネームでこれらの本を出し、顔も本名も隠し通していたが、ある本の取材で、少しでもインタビューに答えると、それが好評だったらしく、対談を頼まれた。それも、「今 このときを 愛してる」の主演の天宮昴と…。

顔はいつさい出さない。昴くんは写真で写るが、私は後姿や、手などだけを載せるらしい。はじめ、断ったんだけど、取材をする編集者の人が高い次元の仲間だと知り、昴くんと、

「これもミッションのうちかもしれないもんね…」

と、お受けすることにした。

取材当日。朝から私は緊張していたが、昴くんに、

「そんなに緊張することないよ。俺がいるんだから安心して」

と笑われてしまった。

少しだけのインタビューは電話でだったし、そんなに緊張すること
もなかったんだよね…。

対談は、出版社の中のカフェですることになっている。昴くんは対
談の前にも一件、仕事が入っていて、そこから向かうって言ってい
た。

昴くんはまた、10月からの新番組に出るので、忙しくなり出して
いた。

今回の役柄は、なんと、テロを阻止する秘密部隊の1員の役。ほん
とに、ミッションインポッシブルのような役が、やってきたのだ。
それもまた、クールな役柄。なんで、昴くん本人とはまったく別の
性格の役がこうも、やってくるのか。

「だって俺も、クールじゃん」

と、この仕事を受けてすぐに、昴くんが言ったときには、心底あき
れてしまったが、それを昴くんは察してただろうに、何も反応しな
かった。あれ？なんですけないのかな…って思っ、昴くんにエ
ネルギーを合わせると、

『ぶはははは。クールなわけないじゃん！』

と心で、笑っていた。

クールじゃないのは知っていたし、昴くんが甘えん坊で、子どもっ

ばいのも、すぐすねるのも、能天気なのも知っていたけど、一緒に暮らしてみたら、それがさらにパワーアップしたって言うか、なんて言うか…。

「違う違う。はじめからこう。別にパワーアップしたわけじゃなくって」

と昴くんは言う。そう、もっと本性を見ることになったっていうか…。なんとも、可愛い…。

でも、昴くんにも、私のことを可愛いだの幼いだの、知るたびにあれこれ言われてしまう。

「ひかりさ、今朝、寝ぼけたの覚えてる？」

「私が？」

「そう。いきなり起きて、昴くん、もう朝よって、まだ3時なのに言っただ」

「ええ？」

「それで起こされて、俺、まだ夜中だよって言ったら、ひかり、また布団に潜り込んで寝たの」

「覚えてないよ〜。それ、夢じゃない？」

「夢じゃないよ」

「昴くんだって、昨日だったかな。先に寝て、寝言を言ってたんだ

よ」

「なんて?」

「もう、食べれないって…」

「え〜?どんな夢だよ、俺!」

夏には暑くつて、昴くんは寝相が悪くなり、ベッドから落ちることがあった。それから、たまに、蹴っ飛ばしてくることも…。なんだから、まだ、子どもみたいって思ったりもした。

かき氷器を買ってきて、よくかき氷を作って食べたり、そうめんをわざわざ、高いところから流して、流しそうめんにして食べたり、ほんと、昴くんはいろんなことで楽しむ天才だ。

そうそう。いろんな行事も好き。2月の豆まきも豆買って、鬼のお面まで買ってきて豆まきをした。

バレンタインは、チョコケーキを焼いてあげたら、そりゃもう、子どものようにはいしゃいで喜んでいたし。

いや、めいっぱい、ファンの子からもチョコはもらっただけどね。でもほとんどは、施設などに送ってあげていたけど。

3月。ひな祭り。昴くんには関係ないと思っていたけど、雛あられを買ってきて喜んで食べてたし、桜の季節には、お弁当を持ってお花見に行くんだって、葉月ちゃんや悟くんまで誘って行ったし。

5月の節句には、もちろんのこと、柏餅を買ってきてうまいって喜んで食べてたし。

7月、近くのお祭りに行つて、焼きそばや綿菓子を買つて、喜んでいたし。

そうそう、20歳の誕生日を迎えてから、お酒を飲むようになり、家でもけっこう、ビール買つてお風呂上りに飲んでいるんだよね。

お酒が入ると、さらに陽気になる。でも、けっこう弱い方で、真っ赤になりすぐに寝てしまう。私の方が強いかもしれない。

8月の頭には、ちょっと離れたところのお祭りで行つてた、阿波踊り、勝手に連の中に入り込んで踊っていたし…。かなりお酒も飲んでいたので、それも昂くんだとばれて、ちょっと、騒動になるかもって心配した。

でも本人はケロってしてて、踊ってはしゃいで、みんなが集まってくる前にさっさと、人混みから抜け出し帰つて来た。

ほんと、お騒がせな人だ。私はそのたびに、ドキドキしてるよ。

「俺といると、飽きないでしょ？」

本当だよな。タフだし…。まだ若いからかな。

「そうだ。悟さんが、今度4人でダブルスしようってさ」

「テニス？」

「そう、ひかり中学テニス部でしょ？」

「うん。高校で途中挫折したけど」

「あはは。すごく強い高校に行つて、ついていけなくなつたんだっけ？」

「そう…。くじけたの。やっぱり、楽しみながらテニスする方が好き」

「だよね。4人でしようよ」

9月の初め、まだ、暑いさなかに近くの公園にあるテニスコートを借りて、4人でテニスをした。

隣のコートは40～50代のおば様方が借りていて、40代くらいの人が、昴さんと悟くんだって見抜いちゃってちよつと大変だった。

でも、昴くんは終始笑顔で、そのおば様方ともお話してて、ほんと、ああいうところはえらいよねってあとで、葉月ちゃんと話していたんだよね。なにしろそういう時、悟くんはクールにこなしてしまつて、あまり相手にもしないから。

そうそう。そんな悟くんも、葉月ちゃんの前だと変わる。最近甘えている。びっくりだ…。

それに昴くんのマンションで、飲んでいくときがあるんだけど、お酒が入ると悟くんもすっかり陽気になる。ゲラゲラ笑って、そりゃもうおおはしゃぎだ。

4人でカラオケにも行ったことがあるけど、昴くんも悟くんもめちやくちゃ、歌がうまい。そういえば、昨年した舞台で二人とも歌ってたもんな…。それもすごく上手だったっけ。

そんなこんなで、私も昴くんも、仕事が忙しいとはいえ、毎日を楽しんでいた。

秋、昴くんも悟くんも連続ドラマが入り、だんだんと忙しくなりだした。特に悟くんは、ドラマをしながら、映画も撮影しているらしい。

葉月ちゃんと悟くんは、一緒に暮らさないのかって聞いたことがあるが、まだ、葉月ちゃんの心の準備ができていないらしい。

悟くんは実は結婚まで考えてるらしいよって、昴くんが教えてくれた。でも、まだ、そういうことも、葉月ちゃんには言っていないらしいけど。

「あれ？心で悟くんが思ってたらばれたりしないの？」

となんとなく、昴くんに聞いてみると、どうやら、悟くんも前の昴くんみたいに、時々葉月ちゃんに知られたら困ることは、隠してるようだ。

「男の人って、ずるい」

って私が言つと、

「だって、全部知ったらきつと、葉月ちゃんショック受けるんじゃないの？」

と昴くんが言った。

「え？」

「やっぱり、ほら……。ちょっと男性恐怖症のところあったし……」

「ふうん……」

私が、ちよつと変な目で昴くんを見ると、

「男と女ってやっぱりさ、違う生き物なんだよ」

とわけのわからないことを言った。

「魂は同じなのに？」

「だけどね、地球上ではね、男と女がいるってことはそれなりにね」

「？」

「よく俺もわかんない。でも、違う生き物だから、いいのかもよ」

「？」

「ああ、やっぱり、俺もよくわかんないよ」

まあ、いつか。悟くんと葉月ちゃんも、とても仲良くやってるよう

だから、それはそれで。

「そうそう、そういうこと」

昴くんは、私が思ってたことにあいづちを打った。

「そういえばさ、最近珠代ちゃんのこと何も聞いてないけど、会ってないの？ ひかり」

「うん、私はね。葉月ちゃんが仲いいみたい。陽平くんとはラブラブらしいよ。妬ける？」

「え？ なんで俺が？」

「ふふ。だって、何回も恋人通しだったんでしょ？」

「じゃ、ひかりは徹郎さんと奥さんのこと、妬いたりすることあんの？」

「ないよ〜〜〜！」

「でしょ？ 同じだよ。別に妬いたりしないよ、俺も」

「そっか…」

昴くんは、エリカさんのラジオにも出だし、仲が良くなるのかと思いきや、全然だったんだよね。

「え？ いきなりなんで、菅原エリカのこと？」

「うん。あんなに綺麗だから、ちょっとは昂くん、ときめいたりしたのかなと思って」

「はあ？なんで？」

「だって、あんなに綺麗だったら」

「うーん。でも、別になんとも…」

「あんまり、話もしなかったの？」

「ラジオに出てからは少し、しゃべる機会も増えたかな。でも、エリ力さんは共演してた年上の俳優さんばかり、一緒にいたよ。俺なんか、まったくの子ども扱いだし」

「寂しいね」

「別に。なんで？」

「あれ？そんなもの？」

「もちろん。なんで？俺、ひかりがいたらそれでいいけど」

『ほんとに…？』

「あつたりまえじゃん」

『…………』

「あれ？なんか疑ってる？」

「ううん…」

「なんだよ。俺はずっとひかりに、夢中なのにな」

「……」

「あ！今、思い切り、照れてた？」

「照れてない」

「うそだ〜！素直じゃないところは、変わらないよね」

「昴くんもね！」

なんて言いあいながら、結局はまた、べたべたついていちゃついでうんだよね。

インタビューは、本当に簡単なものだった。「今 このときを 愛してる」は、何をテーマにしたのか。この小説で1番に伝えたかったことは？これから、恋愛をしていく若い人へ、メッセージをどうぞ。それだけだ。

それに対して、率直に答えていたら、それがそのまま雑誌に載り、それに対してのコメントや、感想のメールなどが、すごく寄せられたらしい。

それに、本の感想も、出版社にたくさん来たようだ。

「空野いのり」のファンは多いらしくて、それで、対談をつてことになったみたいなんだよね。

「対談。何を話したらいいの？」

「編集者の人が、いろいろと進めてくれるから、大丈夫だって。」

昴くんはあいも変わらず、能天気…。

「わ〜るかったね。能天気で！もう、助けてやんないよ、そんなこと言うんだったら」

「え？」

「意地悪なこと聞いたり、対談で俺、いじめちゃおうかな」

「私を？」

「そう」

「ひど〜い！」

「じゃ、俺のこと少しは信頼して、安心してたらいいいじゃんか」

「う…。わかったよ。そうします」

そくだよね。うん。昴くんがいてくれるんだもん。そんなに緊張しなくてもいいよね。

「そ。なんか困ったことがあったらすぐ、俺に心で言ってきて」

「うん」

なんか、本当に安心してきた。緊張してたのが、馬鹿みたいだ。

「ははは！そこまで言う？ま、いつか。その調子でも」

昴くんは、大口を開けて笑うとそう言った。

2 昴さんと空野いのりの対談

出版社に到着した。受付で、空野いのりですと言うと、受付の人が内線で担当の人を呼んでくれて、すぐにその場に、女性が現れた。

あ、女性なんだ。なんだ、男の人だと思っていた。依頼はパソコンのメールで来たし、名前だけ見て、男性の名前かなって勝手に思っちゃった。その人は、40代半ばくらいの女性の人だった。

それから、一緒にカフェに行った。席につくとすぐ、

「空野いのりさん、初めまして。私が今回の企画を提案した相楽悠さがらはるかといひます。よろしくお願ひします」

と、名刺を差し出しながら、自己紹介をしてくれた。

「あ、空野いのりです。よろしくお願ひします」

私はぺこっってお辞儀をした。

「昴さんはまだみたいね。あ、あとで、カメラマンも来るから」

「え？」

「写真撮らせてくださいね。あ、大丈夫。顔は写しません」

「はい……」

「それと、対談の件、受けてくれて本当にありがとうございます」

「いえ…、あの、相楽さんって、海藤冬美さんと知り合いだって聞いて…」

「ええ。瞑想の会で知り合って…。いのりさんも瞑想の会へ行った事があるんですってね？」

「はい。最近だと、夏に行きました」

「そう。じゃ、もしかして…」

「え？」

「2012年 愛と光の地球は、あなたの実体験だったりしない？
目覚めのことが書いてあった」

「あ…はい。全部が実体験ではないんですけど、その…、半分以上は、ノンフィクションなんです」

「まあ、やっぱり…。あの小説に出てくる相手の男性、あなたの彼氏？」

「え…。それはその」

私が困っていると、そこへ昴くんがやってきた。

「すみません、遅れて」

昴くんの後ろからは、カメラを持った男の人が来た。なんだか、見覚えがあるなあって思っていると、低い次元で会ったことのある、榊

さんだった。

「あ……」

私は思わず、声をだしてびっくりすると、

「どうかしたかしら？」

と相樂さんに言われてしまった。

「いえ……」

「空野さん、はじめまして。榊といいます。今日はよろしく願いします」

榊さんはそう言うと、握手を求めてきた。

「はい、よろしく願います」

『榊さんのこと、覚えてる？』

『覚えてるよ。びっくりしちゃった』

『俺も。さっき、このビルに入ったところではったり会って、今日写真撮るのは、自分なんですって言ってきてさ。榊さんも低い次元からもう、この次元に戻ってきてるって。こっちでは、カメラマンの仕事してるんだってさ』

『そつなんだ。すごい偶然』

『違うよ。榊さんもやつぱり、瞑想の会に行つてて、そこで、相楽さんと会つたんだって。偶然じゃないんだよ』

『必然か〜』

『そ、全部がね』

「さあ、じゃ、始めましょうか。あれ？空野さんと昴くんは面識があるの？」

「え？」

「お互い、自己紹介も何もしていないけど…」

「あ…、初めまして。って言ってもその…、俺のことはだって、知ってますよね？」

「はい。もちろん」

「よろしくお願いします」

昴くんはそう言うと、ぺこつてお辞儀をした。

『駄目だ…。なんか、顔がにやける』

と心で、言いながら。私も笑いそうになるのをこらえて、わざと真剣な顔をして頭をさげると、

「そんなに緊張しないでね。楽にお話してくれたほうが、こっちもやりやすいわ」

と、相楽さんが言った。相楽さんは多分、瞑想の会で目覚めているでも、どこまで私たちのことを話してもいいのかがわからなかった。だから、そのまま、昂くんとお互い初めて会ったふりをしていようってことになった。

榊さんは、私のことも知ってるけど、榊さんもまた、初めて会ったふりをしてくれた。

「さて…」

相楽さんは、ノートと、それから、小さなテープレコーダーをテーブルに置いた。

「今回は、どんなことを話して欲しいかというと」

「はい」

だんだんと私は、緊張してきていた。

『ひかり、そんなに緊張しなくても大丈夫』

昂くんは、光を出してくれた。

「20代から30代の女性が読む本なんです。だから、やっぱり恋愛のことを中心に話してほしい。それも、いのりさんの書いた小説は、なんていうか…、そう、無償の愛っていうのかしらね。そういう恋愛ってなかなか出来ないし…。その辺をいろいろと掘り下げて話してもらえたら、嬉しいんだけど」

「無償の…、愛ですか？」

私は、いったいどうそれを昂くと対談したらいいか、考えこんでしまった。

「何か質問してくれたら、それに答えます」

昂くんが、相楽さんにそう言ってくれた。

「そうね。じゃあまず…、この小説を読んだ時の、率直な感想を昂くんに話してもらいたいな」

「感想ですか。そうですね…。感動しましたね。すべてを受け止め、愛してくれる存在ってすごいなってそう思いました」

「圭介のことを受け止めた瑞希のこと…、ですね？」

「はい。あと…、こういった奇跡は実際、起きるんだろうなって…。夢物語ではなく、愛の力と、あとはやっぱり、すべてを受け止めた上で、感謝しながら、今をただ楽しんで生きるっていうのは、病気もがん細胞さえも、消してしまうんじゃないか…ってそんなことも思いました」

「今を、楽しむ」

相楽さんは繰り返した。

「はい」

「それはこの小説の中での、テーマでもありますよね？いのりさん」

「はい」

「いのりさんも、今を楽しむこと、それが大切だと思ってらっしゃるんですね？」

「はい。今っていうときは、戻ってきませんし、大事だと思います」

「未来や、過去は？」

「大事ですけど……。でも、あまり未来に思いを向けてると、今を見失いますよね。過去ばかり見ててもそうです」

私が言うと、榊さんが私の背中から写真を撮った。多分、私は背中が写り、まん前にいる昴くんの顔はしっかりと写されていただろう。

「うん。それ、わかります。今って、実は、すごい感動すること起きてたりするんですね」

昴くんはうなづいてから、そう言った。

「それは、もしかしたら、普通のありきたりのことかもしれない。毎日が同じ日に感じるかもしれないけど、でも実は全然違って、そのありきたりの風景が、ものすごく素晴らしいものだったりするんですね」

「って言うത്？」

相楽さんが聞いてきた。

「うーん、当たり前だっと思って、味わっていないと気づけないんです。明日は何をしようとか、昨日失敗して駄目だったとか、そんな未来や過去のことにとらわれて、目の前のことをまったく味わっていないと、なんでもない風景、時間、空間がそこにあるだけになっちゃう」

昴くんが話したした。

「本当は、なんでもないことじゃないんです。すごく綺麗な空だったり、何かを食べてたらすごく美味しいものだったり、目の前にいる人が実はすごく愛しい人だったり」

「それが今に生きる」

私は思わず、口をはさんでしまった。でも、昴くんは私のその言葉に、うんうんってうなづいた。

「例えば、昨日食べたカレー、美味しかったなんて思い出したとしても、やっぱりそれは記憶であって、本当にうまいって味わえるのは、今っていう時だけなんですよね。確かに、写真やビデオに撮ることもできますけど、やっぱり美しい風景って、実際に目で見たそれが1番感動しませんか？」

「そうですね」

相楽さんはうなづいた。

「今しかないんだよね」

私がまた、ぼつりと言ってしまった。

「今しかない？」

相楽さんが聞いてきた。

「はい。実際に味わったり、感動できるのって、今しかないんです。いえ、確かに過去を思い返してみても、あの時は嬉しかったとか、そういった感情は出てきますけど、でも、それを感じているのですら、今だけなんです」

私が言うと、

「今だけ……」

相楽さんは、繰り返した。

「うん。そう。今だけ。今、このときだけ。この映画は、それがそのまま題名にもなってる」

「今 このときを 愛してる……。ああ、そうですね」

昂くんが言ったことに、相楽さんはうなづいた。

「それと、無償の愛。これについては、どう思いますか？ 昂くん。あ、そうだ。昂くんは恋人がいらっしゃいますが、その人のことはどう思ってるんですか？」

「え？」

相楽さんの質問に、昂くんは戸惑ってしまっていた。

「無償の愛、感じたことありますか？」

「ああ…。そうですね…。はい。あまり、見返りも求めないし、いてくれるっただけで、幸せですし、ありのまま、そのままのその人が好きですし、俺のことも、あるがまま、愛してくれますし…」

「じゃ、この小説の二人のような関係ですね？」

「ああ。はい」

昂くんは、耳を赤くしてそう言った。私も聞いてて、恥ずかしくなってきた。

「そういえば、いのりさんにも、いらっしやるんですね？恋人」

「は？」

いきなり私にふってきて、驚いた。

「ほら、2012年の小説、半分ノンフィクションだって。っていうことは、いらっしやるでしょう？」

「はい…」

「やはり、いのりさんも、無償の愛で愛しているのかしら、その人のこと」

「はい…」

私は真っ赤になっていたかもしれない。

『ひかり！そんなに照れないでよ』

昴くんに心で、そう言われてしまった。

「じゃ、いのりさんが書いた小説、すごく共感できたんじゃないですか？昴くんは」

「はい、思い切り」

「それで、あんなに素晴らしい演技をして、素晴らしい映画になったんですね」

「はい。あ、ありがとうございます！」

昴くんはぺこっとお辞儀をした。

「そう。素敵な話でした。今日はありがとうございます」

「はい、こちらこそありがとうございます」

昴くんはまた、お辞儀をした。私も慌ててお辞儀をした。

「さ、じゃあ、これで終わりましょうか」

相楽さんは、テープレコーダーのスイッチを切り、

「写真はもういい？」

と榊さんに聞いた。

「あ、昂くんが一人のを撮りたいですけど、いいですか？」

榊さんがそう答えた。

「はい」

昂くんの顔を、何枚か榊さんが撮った。そのあと相楽さんが、昂くにインタビューをし始めた。

「実際にいのりさんに会って、どうでしたか？」

ええ？私の目の前で聞く？

「素敵な人です。えっと、思ってた通りの……」

昂くんは、ちよつと言葉に詰まりながらそう答えた。

「彼女とどっちが素敵？」

「え？それはその……。そういう質問はちよつと、答えにくいな……。あはは」

昂くんは笑って誤魔化していた。

「うん、ありがとう。写真はもう大丈夫？」

「はい」

榊さんがそう答えると、また相楽さんは、今日はありがとうございましたと、深々と頭を下げた。

「こちらこそ、ありがとうございます」

私と昴くんも、頭を下げた。それから相楽さんは、

「このコーヒー代は出しますね。コーヒーだけでいいかしら？何か食べる？」

と昴くんに聞いていた。

「あ…。すみません。実はおなかすいてて、サンドイッチいいですか？」

「ミックスサンドしかないけど、いい？」

「はい」

「すみません！」

相楽さんは店員に、コーヒーとミックスサンドを頼み、それを自分のツケにしてくれと言い、

「じゃ、ゆっくりとしていてくださいね」

と言って、榊さんとカフェをあとにした。

二人が出ていってから、

「あ……。やっぱり、緊張した〜」

と私はほっとして、そう言つと、

「あはは、ほんと、緊張してたよね」

と、昴くんに笑われた。

それからサンドイッチとコーヒーが来ると、昴くんは、

「ひかりも食べる?」

と聞いてきたが、

「なんだか緊張しすぎて、おなか痛いからいらない」

と断つた。

「え?大丈夫?」

「うん」

コーヒーだけ飲んだと、昴くんは目の前ですごく美味しそうに食べていた。

『なんでも、美味しそうに食べるよね』

『だって、美味しいから』

幸せな人だよな〜。つくづくそう思う。

「うん、俺、幸せだよ？」

昴くんはにこって笑った。

『これ、どんなふうに載るかな？』

『今日の対談？』

『うん』

『そのまんまじゃない？』

『え？』

『そのまま載ると思うよ』

『私、変なこと言ってなかった？』

『大丈夫。あ…。そうだ。言い忘れてた。俺ね、ラジオの番組するんだ。決まったんだ』

『え？そうなの？』

『前からそんな話があったけど、本決まりになった。10月からやるよ。週一回で、夜の11時から1時間』

『そうなんだ…。楽しみ』

『毎回ね、ゲストも呼ぼうかなって…。それも俺が呼びたい人、呼

んでいいよってさ。でね…』

『うん』

『空野いのり呼びたいって言っておいたから』

『嘘！』

『まじ』

『私なんかがゲストにいつて、何を話すのよ？』

『今日みたいなこと』

『え〜〜〜〜？？？？』

『これは、提案しただけ。まだ決まってるから』

『な、なんだ』

『でもきつと、そうなるよ』

『え？なんでそう思うの？』

『俺の直感』

うそ〜〜〜……。また、緊張しまくらなきゃ、ならないじゃない！

3 昂くんのラジオ

サンドイッチを食べ終えた昂くと、一緒にカフェを出て、ビルを出るところで別れた。昂くんはこのあとも、仕事らしい。他の雑誌の取材があるって言って、マネージャーと待ち合わせた場所に向かっていった。大変だよな……。…。

私は何もなかったので、ぶらりとその辺をうろついて、それから帰りにスーパーに寄って買い物をした。さて、今日の夕飯はどうしようかな……。スーパーで悩みながら歩いていると、

『カレー！』

といきなり声がした。

『へ？』

『夕飯はカレーがいい！最近食べてないし』

『わかったよ』

『福神漬けも買っておいてね』

『はいはい』

『俺、8時には家に帰れそう』

『じゃ、食べないで待ってるね』

『ワン!』

ワンって……。本当に可愛すぎるよ、昴くん…。

そして、8時きっかりに昴くんは帰って来た。

「カレーだ〜〜!」

と、玄関を開けて、匂いをかいで大喜びをしていた。

夕飯を食べながら昴くんが、

「そうだ。やっぱりひかり、ゲストで出ることになったよ」

と、突然言われた。

「え？ラジオのこと？」

「うん。マネージャーが言ってた。空野いのりさんをゲストで呼ぶ件、ラジオのディレクターがOK出しましたって」

「ま、待つて。その本人がまだ、受けるって言ってないんだけど」

「もちろん、受けるでしょ？多分、明日辺りメール来るんじゃないかな」

どどど、どうしよう。

『ぶ……。そんなに心配しなくても平気だって』

私の心の声を聞き、昴くんが笑いながら心で言ってきた。

「いつ？」

「うーん、10月入ってすぐかな」

すぐじゃない！

「だから、大丈夫だってば。俺がいるんだよ？」

「だ、だよね。うん」

もういいや。全部昴くん任せちゃえ。

それにしても、なんでこんな展開になってるんだろう…。

「ミッションなんじゃないの？これも。俺と一緒にラジオから光を出してみ？そりやもう、すごい光でみんな包まれることになるからさ」

「そうだよね。うん…」

そうか。これもまた、ミッションか。

昴くんは、その日は早めに帰ってきたが、翌日から、帰りも遅くなってきた。

私は本も出版したし、暇になってきたので、仕事でも始めようかと思っていたが、昴くんに、

「ひかりには家で、俺のこと待って欲しいな〜」

と言われてしまった。

「でも…」

「しばらくの間でいいから。新婚気分を味わっていたいんだよね」

「新婚？」

「うん。新婚ってきつと、こんなだよな？」

「そうかもね」

『ひかりは、経験してるじゃん』

「え？」

「あ…。ごめん。変なこと思っちゃった」

「ううん。そうだね。そういえば、新婚時代もあったんだっけ。だけど、今のほうが毎日楽しいな」

「え？」

「昂くんって楽しむの天才だし、見えて飽きないし。めっちゃ、可愛いし」

「めっちゃ、可愛い…？」

昴くんは真っ赤になった。

「あれ？それって俺、喜んでいいの？」

「くす…。もちろん」

そう言うのと、ますます真っ赤になっていった。

ラジオの出演依頼がきた。私はすぐにOKの返事をした。生放送だ。いったいどんな感じなんだろう？でも、それも心配しないで、今を楽しむことにした。

そしてあつという間に、10月、ラジオに出る日がやってきた。

「この前の対談のが載ってる雑誌が出たよ」

昴くんがラジオ出演の日の前の晩に、そう言って持ってきてくれた。

「わあ…。本当だ。あのとき話したことが、そのまま載ってる」

「うん」

「昴くん、かつこいいね」

「ひかりは、後姿とちよこつと手が写ってる」

「うん」

「あ、そうだ。明日だけど、ちよこつと人生相談みたいなのを受け

るコーナーがあつて、それにひかりも出てもらつようになるかも」

「じ、人生相談？」

「うん。そんなに深刻なものじゃないと思うけど」

「そう」

そんなのできるのかな、私…。

「俺も一緒にそんとき相談乗るから、大丈夫」

「うん」

私は、昴くんが渡してくれた雑誌をぼくくってながめた。

「光を出しながら、話せばいいんだよね？」

「ほら、低い次元の記者会見、覚えてる？」

「うん」

「あんな感じだよ」

「そうか。うん、わかった」

あまり考えるのはよそう。きっと、すべてがうまくいく。

「うん。そうだよ」

昴くんはそう言うと、にっこりと笑った。

翌日。昴くんはドラマの収録があり、朝早くに出かけていった。私は部屋の掃除や洗濯を済ませ、緊張をほぐすつもりで、新宿の本屋に遊びに行った。

行つてすぐに葉月ちゃんの休憩時間になり、一緒にランチをした。

「今日から昴くん、ラジオが始まるの」

「え？ラジオですか？」

「そう。それで第一回目のゲストが、私なの」

「ええ？」

「あ、私って言っても、空野いのりだね」

「あ！今日出た雑誌買いましたよ。昴くんと星野さん、じゃなくつて、空野さんの対談の出た……」

「ありがとう」

「良かったです。今日のラジオも楽しみ！あ、生放送ですか？」

「うん」

「絶対にラジオの前にかじりついて聞きます！」

「え〜。照れるよ。なんとなく聞いてくれてたらいいいから」

「あはは。そんな〜。正座して聞いちゃいますよ〜」

「いいってば」

私は本当に、困ってしまった。

葉月ちゃんと別れてから、新宿の街をぶらついた。周りから、黒い霧が出ることが少なくなっていた。

テレビのニュースも、怖いばかりのニュースから、こんな素敵なことが起きましたっていうニュースが増えてきていたし、黒い霧を出す番組も減り、光を出す芸能人も徐々に増えていた。

悟くんも昴くんも、番宣でテレビに出ていたが、そのときにもすごい光を出していた。

だんだんと次元が上がってきている…、そんな気がした。

白河さんのブログにも、目覚めましたというコメントが多く書かれていたし、瞑想の会はどんどん人が集まっているらしかった。

夜、そろそろ家でご飯にしようかと帰ろうとしたとき、昴くんの声がした。

「ひかり、俺そろそろラジオ局に入るから、ひかりもおいで」

「え？でもまだ、時間…」

『うん、いいよ。早めに来て。一緒に打ち合わせしようよ』

『夕飯は？』

『こっちで一緒に食べよう』

『うん、わかった』

私はラジオ局に向かった。着くと、昂くに声をかけた。

『着いたよ』

『入り口の方で待ってて。今行く』

そう返事が来た。入り口付近にいと、高校生か大学生の女の子が二人、近づいてきた。

「あの…」

「え？」

「ラジオ局の方ですか？昂くん、今日からラジオですよ。生放送ですよ。」

「え？私はその…」

『昂くん！なんか話しかけられちゃったよ〜』

『誰に？』

『女の子二人』

「昂くん、もうラジオ局入ったか、教えてもらっわけにはいかないですか？」

「え…」

こ、困った…。私がどうしようか、立ちすくんでいると、その時昂くんが来た。

「あ！」

その子達はすごく驚いて、声にならない声で喜んでいた。

「す、昂くんだ……。きや……。！」

「あ？どうも…。えっと…？」

「今日からラジオ出るんですね。応援してます。あ、これ差し入れます」

紙袋を、昂くんにあげていた。

「あ…。はい、どうもありがとう」

昂くんはにこって笑うと、それを受け取った。

「やった〜」

その子達は、大喜びをしていた。

『ひかり、中入って…』

昴くんに言われて、私は中に入った。それから、昴くんについて、エレベーターに乗り込んだ。

「お弁当あるから、食べる？それが、どっかに食いに行ってもいいし」

「いいよ、お弁当で。打ち合わせもあるんでしょ？」

「うん」

「ねえねえ。ここって他にも有名人来るの？」

「何それ。ミハー！」

「ええ？いいじゃないよ〜」

「来るかもね。誰に会いたい？」

「えっと…。誰が来るのかな？」

「悟さん」

「悟くんはだって、いつだって会える」

「じゃ、ほら、すごいカッコいい若手の俳優」

「誰？」

「天宮昴」

「……………」

『なんだよ、なんで無言？っていつか、呆れてる？』

『ちよつとね』

『なんでだよ？それだけで、満足でしょ？』

『はいはい』

『ちえ〜〜〜！』

あ、すねた…。

「こつち」

昴くんはすねた顔つきのまま、部屋に通してくれた。そこには、若い男性と、40代くらいのメタボの体系の男の人がいた。

「あ…。空野いのりさんですね？」

二人は席を立ち、私に挨拶をしてくれた。

「はい。今日はよろしくお願いします」

「こちらこそ。これから打ち合わせをします。その前に、お弁当があるので、どうぞ召し上がってください」

「はい」

昴くんは椅子に座り、

「どうぞ。ここ...」

と隣の椅子を、引いてくれた。

「ありがとう」

その椅子に座ると、若い男性がお弁当やお茶を持ってきてくれた。
昴くんの座った前にも、同じように持ってきた。

「いただきます」

昴くんはそう言うとお弁当を開けて食べた。私も小声で、
いただきますと言い、食べた。

「また、緊張してるね」

昴くんが私のエネルギーに合わせてから、そう言ってきた。

「わかる？」

「わかるよ」

「さつきから、ドキドキで」

「大丈夫だって！これから長いし、ちゃんと食っておいた方がいい
よ」

『でも、喉通らない…』

『それもわかってたけど。だけど、食つといてね』

『うん…』

ラジオ局の人は、

「お弁当食べ終わったら、打ち合わせをします」

と言に残し、部屋をあとにした。

「は~~~~~」

長いため息をすると、

「緊張しすぎ！リラックスリラックス！」

と昂くんに言われてしまった。

打ち合わせは、私は簡単なものだった。昂くんも、結構簡単に済ませ、ディレクターに説明されたことを、あっさりと了解して、

「もう、ばっちりです」

と笑って答えていた。

それから、番組宛に届いている葉書、手紙、FAX、メールをディレクターと一緒に、目を通しだした。

「空野いのりさんがゲストだとわかってから、メールもどんどん来るだろうね。人生相談のコーナーには、いのりさんにも答えてもらいたいから、そっちのは、ラジオ始まってからきたメールを、採用しようと思う。」

「はい」

「この辺の質問は昴くんに来たものだし、何かいいものがあつたら、ピックアップして」

「はい」

「それに合わせて曲も選びたいんだけど、昴くんも何かいいのがあつたら決めとして」

「はい」

昴くんは真剣な顔つきになり、メールを見始めた。いつものあの集中力で、話しかけられない感じだった。私は黙って、隣の椅子に座っていた。

「ひかりも、そっちにあるFAX目を通してみて」

「え？」

「ファンの立場に立って、どんな質問に答えたら喜ぶか考えてみて」

「うん」

真剣なんだな…。昴くんって、楽家だし脳天気だけど、ファンの子達は大事にしてる。やっぱり、真剣にこういうのも取り組むんだ。FAXを見ていると、かなりの質問が私のことだった。私って言うのは、昴くんの彼女のこと。

中には、空野いのりとの対談を読んだけど、空野さんのことはどう思うのかとか、そんなのもあった。

あと、恋愛で悩んでいるとか、10歳も年が下の人を好きになったけど、どうしたらいいとか、そういった相談も多かった。

「けっこうあれだね。ひかりのことや、空野いのりのことを聞いているメールも多いね」

「FAXも多いよ。そういうの…」

「そうなんだ」

「あと、恋愛相談も。年下の人を好きになったけど、どうしたらいいのかとか」

「ふうん…」

昴くんは、こっちの話を聞きながらも、パソコンに目を向けていた。

「へえ…」

「何？」

「『2012年 愛と光の地球』のように、魂の片割れに出会っただって。そんなメールがあった」

「へえ…」

「あ…。これ、誰だ？ぜひ、ミッションを遂行し続けてください。自分もしていきますって」

「名前ないの？」

「イニシャルだけ。誰だろうな。Nって…」

「N？ノエルさん。夏樹くん。それが…」

「あ。わかった。夏樹さんだ。父はとても元気ですって最後に書いてあった」

「そう…」

「仲間、また増えてるよね。メールからも光が出てるの、わかる？」

「うん。わかる。わ…。夏樹くんのメールも光が飛び出てるね」

「うん。光を送ってくれたんだろうな」

「うん」

他のメールからも光が出ていて、なんだか感動してしまった。

「ラジオからも、光いっぱい出しちゃおうね」

昂くんがそう言うと、光が飛び出てダンスをしていた。

「うん」

私も光を出しながらうなづいた。

4 光を送りながら

スタンバイをしていよいよ、ラジオがスタートした。昴くんもさすがに、緊張してる様子。曲が始まり、しばらくして昴くんは、

「こんばんは！天宮昴の、ミッドナイトデート、始めました！」
と元気に言った。

昴くんは緊張していたのに、すごく快調に話し出した。そして提供を伝えると一回、CMになった。

「ほえ……。き、緊張……。俺、変なこと言ってなかった？」

と私に向かって聞いてきたが、それを聞いたディレクターが、

「昴！いい調子！」

と笑いながら、言ってきた。

「あざ〜っす」

昴くんは、にこって微笑むと、ディレクターに向かってピースをした。

CM開け、また元気に昴くんが話したが、すぐにゲスト紹介をしますと言い出した。

『え？もっ？』

『もうだよ。さっき打ち合わせしたでしょ?』

『そ、そうか。昴くんの話聞きいつてる場合じゃないね』

「今日から始まったラジオ番組ですが、第一回目のゲストは、僕が1番に呼びたかった人なんです。映画「いま このときを 愛してる」の原作者、空野いのりさんです」

昴くんに紹介された。

「こんばんは。よろしくお願いします」

昴くんから、挨拶して来た。

「はい…。こんばんは…」

「空野いのりさんです！名前もペンネームだし、顔もふせ、正体不明のいのりさんですけど、今回特別にゲスト出演お願いしちゃいました」

「空野いのりです、よろしくお願いします…」

「あ、緊張してます?」

「はい。思い切り…」

「あはは…。僕もまだ、ちょっと緊張してます。ま、でも楽しんでいてください」

「はい…」

「えっと、せっかくいのりさんが来てるんで、質問や、相談をメールやFAXで受け付けます。聞きたいことがあったら、どんどん送ってください」

「はい…」

「それまでは、僕がいろんなことを質問しちゃおうかな」

『え?!』

「あ、駄目かな? 正体は明かさないんですもんね」

「はい」

「そうだ。対談して雑誌にそれが載りまして…。それを見た人からFAXやメールをいただいています。質問もあるので、いいですか? 聞いても」

「はい」

「えっと…。これは、ラジオネームが、ミッドナイトデートがしたいさんから…」

昴くんはパソコンの画面をちょっと見つめてから、話し出した。

「…あ。僕とミッドナイトデートがしたいってことか…。これ、僕といのりさんに質問できています。もし自分なら、昴くんと夜中に星空を見ながらデートをしたいですけど、昴くんや、いのりさんは

どんなデートがしたいですかって」

「夜中に？」

「いや…、それは夜中じゃなくても、いいんじゃないかな？」

「えっと…」

デート…？

「僕だったら、海、ドライブ行きたいです。あの圭介と瑞希みたいなデートいいですね」

「あ…。免許取ってるんですけど…今」

「はい。夏から教習所通って。まだ、忙しくて行けないこともあって、取れてないけど…」

「ドライブもいいですね。あとは、ディズニールランドとか…。あまり、デートで行ったことがないから」

私が言うと、昴くんが目を輝かせて、

「俺も！じゃなくって、僕も行きたいです。デートで行ったことないっす。まだ、小学生の頃家族で行った…、きりかも！」

「え？そうなんだ」

「いのりさんは？って内緒ですよ。正体ふせてますもんね」

「はい」

『今度、行こうよ～～！ひかり！』

『え？』

『デイズニーランド、行こうね！』

『うん…』

昴くんの目は、わくわくしてるのがまるわかりだった。

「え～～と…。あ、メールが早速来ました。いのりさんの好みのタイプは？昴くんみたいな男性は好きですか？だって…」

「好みですか？う、う～～ん。ないかな」

「ない？」

「はい」

「で？僕はどうですか？」

「え？」

『そんなこと言うの？！』

『うん、もちろん』

「い、いいんじゃないですか？」

「何がですか？」

「だから…。素敵なんじゃないかなって…」

「ふうん。そうなんですか…」

昴くんは声は冷静な声だったけど、顔はにやけていた。

「あ、昴くんはいのりさんのこと、どう思いますか？だって…。そうだな…」

『ほんとにそんなメール来てるの？』

『来てるよ。ほら』

パソコンをのぞくと、本当に来ていた。

「あ、これはラジオネーム、圭介がタイプさんからですけど…。いのりさんは、多分、印象から言って、瑞希に似ていると思います。で、俺…いや、僕の好みかって言うと、もろ、そうですね」

「え?!?!」

あまりのことを言うから、思わず叫んでしまった。

「いのりさん、そんなに驚かなくっても…」

「ごめんなさい…」

「次の質問いいですか？質問っていうか、相談事です。こういうの多いんですよ。実は自分も10歳以上年下の男性に、恋をしています。でも、怖くて告白も出来ません。どうしたらいいですか？これは、匿名希望さんから…。それとか、12歳も下の恋人がいます。結婚もしようと言われました。でもまだ、彼は22歳で、彼と結婚していいか悩んでいます。これはラジオネーム、30女さんから…」

「そういう悩みを持った人が、けっこういるんですね」

「はい。どう思いますか？」

「どう思うか？」

「うん」

「昂くんは？」

「俺？俺は年齢なんか関係ないって思いますけど。あ。俺も10歳年上の彼女いるし」

「……」

『変なこと言わないでよ』

『言わないよ』

「結婚はやっぱり、悩むのわかります」

「え？どうして？」

「彼の人生はこれからだしって思うかも」

「いいんじゃないですか？俺だったら、しちゃえばいいのって思いますけど」

「……。それはかなり、無責任……」

「え？」

「えっと……、ただね、結婚にこだわる必要もないかなって、それは思います」

「こだわる？」

「うん。それに縛られることはないのになって、最近思う」

「じゃあ、もしいのりさんが、10歳年下の人と付き合ってて、プロポーズされたら？」

「すぐには、受けられないかな」

「なんで？」

「なんでかな？わからないけど……。でも、結婚ってなんなのかなって、ちょっと試してみたりする」

「うん……。そうだな……。家族になるってことかな？」

「家族？」

「縛るとか縛らないとか、そういうんじゃない…。なんていうのかな。そんな制度はなくても、愛し合っていたら、信頼しあっていたら、それでいいような気も、俺もするけど…。でも、家族ってことで考えたら、結婚もいいかなって」

「子どもを産んで…とか？」

「ああ。それもありだし…。子どもがいなくて、夫婦だけっていうのもいいよね」

「夫婦？」

「うん。夫婦って恋人と全然違う響きがある」

「…どんなイメージがあるの？ 昴くんは」

「夫婦の？ そうだな…。うーん。なんか長年寄り添っていくイメージ。恋愛とか通り越して、信頼…。そんなものかな。長年寄り添って、「っーかー」の仲になって…。あ、フルムーンとか行っちゃって…」

「昴くんのご両親は、恋愛結婚？」

「そうですね、社内恋愛だって言ってた」

「仲いいの？」

「いいですよ」

「ふうん…」

「圭介と瑞希は結婚したから、いのりさんは結婚に対して、そんなこと思っていないと思った」

「そんなこと？」

「結婚にこだわらないとか、縛られたくないとか、そういうの」

「うん…。最近思ったことだから」

「何かあつたんですか？」

「え？」

『聞くの？どこで？』

心で言うと、昂くんは、

『やっぱり、駄目？』

と心で答えつつ、

「あ。駄目ですね。正体ふせてるから、自分のことはあまり言えないですね」

って、言葉にした。

「うん」

「じゃ、次の質問に行きます。あれ？これ俺にだな…。えっと、こ

のラジオは彼女聞いてませんか？空野さんが好みなんて言って、大丈夫ですか？…あ、ラジオネームみーちゃんから」

「ふふ…」

思わず私は笑ってしまった。自分に妬いたりはさすがにしないよって…。

「え？えつと…。笑われた？俺…。ええつと…。そうですね。でも大丈夫です。あの、俺の彼女もいのりさんっていうか、小説ファンだし…。きっと、会ったら好きになるんじゃないかな…。なんてね…」

なんてねって、本当、なんちゃって…だよ…。昴くん、そうとう焦ってない？

「ああ。次、次の質問行きます。あ…。悩み相談か……。愛してる人が、病気で…。あ、圭介と瑞希みたいな立場なのかな？瑞希のように、とても寛大になれませんか？」

「うん…」

「この小説は、いのりさんの実体験だったりしますか？もし、彼が病気で死ぬかもしれないってわかったら、どうしますか？」

「そうだね…。あ、これは実体験ではないんです。だけど、本当に今に生きて、がん細胞が消えちゃったっていう話は聞いたことがあります」

「うん…」

「そうだな…。やっぱり、恋人が死に直面してたら、悲しいし、苦しいかな。あ…、昴くんはどう？」

「俺？うーん。俺の場合は自分が体験したことから言うと…。むちやくちゃ、悲しいですね。絶対にそんなの嫌だっと思っていました。すんごく悲しい。でも…、でも悲しいからって、愛してる人から去ろうとか、離れようなんて思わないですね。むしろ、相手が悲しんだり苦しんでいたら、一緒に感じるかな」

「……」

私は、低い次元で起きたことを思い返した。

「私なら…、苦しんで、悲しんで、怖がってる相手も、そのまま愛しちゃうかな…」

ぽつりとそう言うと、昴くんはにこって笑って、

『そうしてくれたもんね』

と心で、言ってきた。

「そういつのつて、奇跡を生むかも…。相手が生きることを選択したら、病気も治るかもしれないですよ。あ、無責任なこととは言えないですけど。でも、この世界ってけっこう、自分の思い込みでできてるし」

昴くんはいきなり、そんなことを言い出した。

「生きることを一瞬、一瞬、味わって感じて、喜んでいたら、細胞も喜んで元気になるかもしれない」

昴くんはそう続けた。

「だから、うん。悲しいのも苦しいのも、しっかりと味わっていいと思います。でもあまり、未来のことばかりを思っ、不安になったりしないで、今を、大事に生きて欲しいです」

昴くんから、ものすごい光が飛び出した。

「いのりさんは？いのりさんが書いた小説も、そういうことを言いたかったんですね？」

「うん。そう」

「生きることの素晴らしさを、多くの人が感じられたら嬉しいって、俺思います」

「うん」

「それと、苦しみも実は、自分が創っていることだって」

「ああ。それは私も思っ」

「やっぱり？」

「うん。起きてくることって、全部、ニュートラルで、そこに意味づけをしてるのは自分だっ、思っ。とらえ方一つで、幸せにも不幸にもなる。だから、どうとらえるかって大事なんだけ。でも、も

つと大事なことがある」

「うん。本当は、みんな幸せだったことでしょ?」

「そう…。みんな生まれたときから、見守られ、愛され、幸せなんだよね」

「わかる。でも、こういうのって、なかなか話しても通じない。わかってもらえない」

「うん…」

「今、苦しんでる。不幸だって人に向かって、そんなあなたも幸せなんだよなんて言っても、やっぱり納得できないものだよね」

「うん。でも、実は幸せなの。愛されてるすばらしい存在。例外の存在なんていない。そこに気づいて、わかってくると、あまり苦しむこともなくなるし、現実が変わるかな」

私たちは光を出しながら、そんな話をした。

「あ…。いのりさん、ここで歌、いいですか?一曲かけても」

「え?はい」

「これ、いい歌なんですよね。平原綾香さんのジューピター」

「あ。私も好き」

「では、かけたいと思います。聴いてください」

歌が流れ出した。

「やべ…。もうこんな時間だ。ひか…。いや、いのりさんのゲストで出てもらう時間、もう終わりだよ。早いな」

「終わり？ やった〜」

「え？ なんで？」

「だってもう、喉カラカラ。緊張しっぱなしで…」

「でもまだ、一緒に伝えたいこといっぱいあったな。また、ゲストで来てよ」

「うん。またの機会にね」

「あ、曲終わる」

昴くんは咳払いをして、黙った。

「ジュピター、聴いてもらいました。今日のゲストは、空野いのりさんでした。ありがとうございました。俺としては、もっともっといのりさんの話が聞きたかったし…。ぜひ、また来て欲しいんですが、また、出てもらえますか？」

「はい。ぜひ」

「やった！じゃ、また、今度のいのりさんを呼ぶ時に、みなさんから相談をたくさん受け付けたいと思います」

「はい」

「空野いのりさん、本当にありがとうございました！」

「ありがとうございました」

そう私が言うと、CMが流れ出した。

「お疲れ様です」

若い男の人が入ってきた。そして、私はその場を離れた。

昴くんは一人で、ラジオを続けた。私はホットコーヒーをもらい、ひといきついた。

『ああ……。疲れた……。昴くんは、ずっとテンションを下げずに、すごいな……。』

そう思いながら、昴くんのことを見ていた。

笑ったり、相談に真剣に答えてたり……。きつとラジオを聞いているフアンの方は、喜んでるんだろうな。

昴くんからは、終始、光が飛び出していた。

ラジオが終わった。

「お疲れ、昴」

ディレクターが、昴くんの背中をぽんとたたきながら、そう言った。

「お疲れ様です」

「このあと、どうすんの？」

「タクシーで帰ります。あ、空野さんは送っていきます」

「お前が？」

「タクシーで」

「送り狼になるなよ」

「なりませんよ！もう……」

昴くんは、そう言うと苦笑いをした。

「じゃ、空野さん、今日はお疲れ様です。多分、またゲストで出ていただくことになると思いますから、その時にはよろしくお願いします」

ディレクターからそう言われた。

「はい。ありがとうございます」

私は頭を下げ、その場を昴くんと立ち去った。

「おなかすいた〜。なんか食っていかない？それとも、家で食べる？」

「うん。お店開いてないでしょ?」

「ファミレスか、焼肉か、ラーメンか…。居酒屋もあいてるかな。飲んでく?」

「帰りたいな。のんびりしたいかも」

「じゃ、タクシー乗って帰るか」

「うん」

タクシーを拾い、私たちはマンションに戻り、コンビニでお菓子やパンを買い、家に帰った。

5 反響

家に着くともう、夜中の1時を過ぎていた。

「昴くん、先にお風呂入る？」

「一緒に入る」

「……」

「あ！へへへ」

いきなり昴くんがにやけた。

「何？」

「だって、今、ひかり喜んでいたから」

「私が？」

「一緒にお風呂嬉しいなって」

「思っていないよ」

「思ってたってば。お風呂でいちやつけるわ〜。やった〜って」

「思っていない！」

もう〜。勝手なことばかり。

『本当に思ってたってば。素直じゃないんだからな〜』

心の中で昴くんは、ぶつくさ言っていた。

バスタブと一緒に入った。

「窮屈だから、疲れ取れないんじゃないの？」

私が聞くと、

「ぜ〜んぜん！一気に疲れふつとんじゃうよ」

と、昴くんは後ろから抱きつきながら言ってきた。それから、首筋にキスをしてくる。

『わ…』

『わ…？』

「なんでもない」

『そういえば、最近また俺、夜遅くって、夢でしかHしてなかったね』

『Hって言っな〜』

「なんで？あれ？照れてるの？」

『なんとなく、嫌だ』

「ふん…。じゃ、愛し合ってたよな？」

「夢じゃ、昴くんじゃれついてきてたじゃない」

「でも、夢だし…」

昴くんはそう言いながら、また私をぎゅって抱きしめた。

「ひかりにこうやってくっついてると、すんごい癒される。だから、疲れなんかなくなっちゃう」

「…うん。それは私も同じ」

「でしょ？」

「今日の緊張がちがだった体も、今、ふにゃふにゃになってるかも…」

「あはは。何それ！また、もしかして溶けそう？」

「うん……」

しばらく黙って二人で、同化していた。それから、ふっと昴くんは私から離れると、

「ラジオ聞いてた人どうだったかな…」

とぼつりと言った。

「え？」

「何を感じてくれたかな……」

「うん……。本当に私また、ゲストで出ることになる？」

「……。多分ね」

「だけど、視聴者が空野いのりの話なんて聞きたくないって言った
ら？」

「あはは。それはないと思うけど」

「わかんないじゃない」

「ま、先のことはいいや。流れに任せようよ」

「うん……」

「それより！ ディズニースーランド！ 絶対に行こう！」

「え？ でも撮影」

「今のドラマが終わったら、絶対に行こう。1～2日はオフあると
思うし……」

「うん。わかった」

『やい……』

昴くんから、うきうきわくわくのエネルギーが伝わった。

『昴くん、本当に可愛いよな〜』

愛しくなつて、昴くんの腕を両手でぎゅって握り締めた。

「あ。その気になりました。俺…」

「え?!」

「っ、お風呂!」

『いいじゃん!』

ええ…?!

お風呂から出ると、髪を半分乾かして昴くんは、

「も、駄目限界…」

と言って、ベッドに倒れこんだ。そしてすぐさま、寝息を立てて寝てしまった。相変わらずのこの寝つきのよさ…。

『もう、だからお風呂でHなんてしなければいいのに』

『あ。ひかりもHて言った…』

寝ているのに昴くんが、私の心の声に答えてきた。

『ああ。今のナシ!』

『ぶふ!面白い、ひかりって』

『なんだよ〜。もう、寝ているくせに…』

『ひかり〜。早く夢の中に来て!』

え?夢でもまさか…。

『そうそう。愛し合おうよ、ね?』

『……』

『やった〜!』

え?何がやった?

『今、ひかりが喜んでた』

喜んでた?うそ。呆れてたの間違いじゃないの?

『喜んでたよ。もう、ひかりってば〜』

……。そうか。喜んでるのか。私…。

『そうそう。素直にならなくっちゃね』

は〜。そうだね。多分、喜んでるの。でもまだ、隠そうとしてるの。なんでかな?昂くんなんて、嬉しいと本当に嬉しいって思っ

てるし…。

『ひかりはね、俺にすけべだって思われたくないんだよ』

え？

『それから、自分でも認めたくないんだよ。だけどさ、俺と愛し合うのを喜ぶのは全然すけべなことじゃないじゃん』

…そうか。

『あ。いや、すけべでもいいんだけどさ。俺なんかすんごいすけべだし…』

『アイドルのくせして、そういうこと言っしな〜』

『いいの、それよか、早く寝ようよ〜』

…昴くん、ぐーすか、うつすらいびきもかいてるのに、なんで心で会話が出来ているのか…。謎だわ。

髪を乾かし、ベッドに入り、昴くんにくっついて眠りについた。

「ひ〜〜か〜〜り〜〜。待ってたよ〜〜〜!」

夢でもベッドの中で、昴くんに思い切り抱きつかれた。

ぎゅ〜〜。

「あれ？じゃ、今まで、夢の中で一人で寝てた？」

「うん。声だけ聞こえてたけど」

昴くんはいつものごとく、しつぽがはえてて、ぐるんぐるん振りまわってた。

「今度さ、耳もはやしてみない？」

「耳はもう、あるじゃんか。人間の耳」

「あ。そっか。じゃ、肉きゅう…」

「無理無理」

なんでも可能なんじゃないの？夢なら…。

「だって、犬の手になったら、ひかりとこうやって、指を絡ませられないでしょ？」

昴くんは私の指に指を絡ませながら、そう言ってきた。

「ひかり、いい匂い」

「え？昴くんと同じ匂いだよ。同じ石鹸つかってるんだもん」

「違うよ。シャンプーだよ。これ…」

「ああ。シャンプーは違うもんね」

昴くんは、夢の中じゃちょっと強引。なんでかな？強気になるのか

な？でも、昴くんのぬくもりを夢でも感じられて、私は幸せに浸っていた。

翌朝、早めに起きて、朝ごはんを作った。今日もまた、昴くんは早くに出る。

「おはよ〜」

寝癖爆発、眠気眼の昴くんが起きてきた。

「おはよう」

昴くんは私がそう言うのと、後ろから抱きつき、またうなじにキスをする、洗面所に向かっていった。

『えつと〜。今日はなんだっけ？あ…。そうだ。ロケだ…』

今日のスケジュールを頭で、思い返しているようだ。

それから、朝食を取り着替えをしていると、携帯が鳴り、マネージヤーが迎えに来てるから、もう行くねってキスをして、さっさと部屋を出て行った。

『行つてらっしゃい』

『うん。行つてきます』

心で返事が返ってきた。

さて、洗濯をして、掃除をしようかな…。

洗濯も実は、幸せだ。昴くんの洗濯物を干すのが嬉しい。ベランダが南向きで、お日様が良く当たる。そこに二人の洗濯物を干すのが、なんだか嬉しかった。

ある日、なんとなくそれを写真で撮ると、ベランダに太陽光線が入り込んで、その回りを小さな光が嬉しそうに飛んでいた。

「なんの光？」

わからなかったが、喜んでる感じがして、私も嬉しくなった。太陽を写すといつも、その光と一緒に写る。

「不思議…。今度昴くんにも見せてみよう」

何かのエネルギー体なのかな？

それから次のラジオの日までに、昴くんのブログにも、私の小説のコメント欄にも、たくさんのメッセージが来た。ラジオを聞いてた人からのメッセージだった。

> もっと、空野いのりさんとのやりとりを聞いていたかったです。

> 昴くんの素が見れて、嬉しかった。空野いのりさんとのやり取りは、すごく自然で、ますます昴くんのことを知ることが出来て、嬉しかった。

> 恋愛の相談をもっと、受けて欲しい。空野さんの意見と昴くんの

意見をどっちも聞きたい。

>私の悩みを聞いてくれてありがとうございます。結婚についてはもう少し考えてみます。でも、彼が大好きだから、一緒にいることをもっと、喜び味わいたいと思います。先のこともですが、今が大変なんですもんね。

あ…。彼とのことを相談してきた人だな…。

>私と彼のことで、相談に乗ってもらえて嬉しかったです。昂くんも、大好きな人が亡くなった経験をしたんですか？今度、その辺をもっと詳しく聞かせてください。

あ…。この人は、彼氏が病気の人だ…。

そうか…。なんだか最後のほうは、わけわからないことを言っちゃってなかったかなって思ったけど、こんなに反響があっただ。

ラジオだからって気負わないでも、いつものように昂くんと話をただしている…。それだけでもいいのかもしれないな。…。そんなことを感じた。

6 悟くんと葉月ちゃん

昴くんのラジオの前の日、昴くんが、

「明日のゲストは悟さんが来てくれるんだ」

と朝、出かける前に喜んでいた。

「そうなんだ、楽しみ！」

私も昴くんと悟くんのことから、すごい光が出るんだろうなって楽しみだった。

その日も、洗濯や掃除を済ませ買い物に行き、家でのんびりしていると、昴くんがいきなり、

『ひかり！テレビ観て！』

と言ってきた。

『え？うん』

もしかまた、私と昴くんのこと？って思ってテレビをつけたら、悟くんがインタビューを受けているところだった。

「結城さん、今日のスポーツ新聞に腕を組んで歩いてたところが写真に撮られてますが、あの女性は誰ですか？」

え？悟くん…？

「彼女ですか？」

レポーターの女性が、ぐいぐい悟くんに接近して聞いていた。

「ノーコメントですよ。そこどいてください。悟はこれから仕事で、テレビ局に行かないとならない。忙しいんですから」

マネージャーだか、事務所の人がそう言って、レポーターを追いついてた。

「一言、彼女かどうかだけでも」

レポーターは、食い下がらなかった。

「はい。そうです。でも、一般の人だから、そっとしておいてもらえますか？」

それだけ悟くんは無表情に言っと、さっさと車に乗ってしまった。

その後、スタジオの方に画面が変わり、どうも、その映像は1時間くらい前の映像のようだった。

「今日のスポーツ新聞の写真はこちら」

スタジオにいる、アナウンサーの女性がそう言った。

悟くんだとわかる写真。腕を組んで悟くんの方を見て仲よさそうに歩いてる女性は…、ああ。葉月ちゃんだ…。斜め後ろから写ってるけど、わかる…。撮られちゃったか…。

『観た？テレビ』

昴くんがまた、話しかけてきた。

『うん』

『なんか、俺の時みたい。明日のラジオで、こりゃもう暴露するしかないね』

『ええ？』

『そうだ。葉月ちゃんからなんか連絡あった？』

『ないよ。これ、知ってるのかな？今日もバイトだと思うし』

『一般人だそうですね。そういえば、結城くんは確か昨年、女優さんと噂ありましたよね』

司会者がそう言うと、あるコメンテーターが、

「破局したという噂が、昨年末に流れていましたが、この彼女が原因でしょうかね？」

と、言い出した。それから、みんなして、ああでもないこうでもない、話し出し…。うーん。他人のことなのに、なぜこうも、盛り上がるのか。

私は、プチッとテレビを消した。ワイドショーはいまだにこういうのをしてるんだよね…。それから葉月ちゃんにメールしてみた。

>ワイドショーで悟くんと葉月ちゃんの写真が出たよ。悟くんが、レポーターにつかまって、彼女だって言ってた。

でも、返事はなかった。やっぱり、仕事なんだな…。

6時頃になり、ようやくメールがきた。

>そうなんです。ランチしてたら、悟くんが心で話しかけてきて、スポーツ新聞に写真載っちゃったって…。ワイドショーでもしてたんですか？その新聞も写真もまだ見てないんですけど、私だってわかつちやいますか？

>わかんないよ。ほとんど顔写ってないし。でも、悟くんは丸わかりだった。

>腕組んで歩いてるところだって。

>うん、仲よさそうに。

>ああ！油断しちゃったんです。ちょっと人通りから外れてたし。でも、バイト先の人々には、ばれてないみたいで。

>明日悟くん、昴くんのラジオに、ゲストで来るんだよ。

>え？なんか言っちゃうかな。

>どうかな？昴くんが聞きだしたりして。

>ええ～～！どうしよう。星野さん、昴くんに釘さして置いてくだ

さい！

>わかった。つつこんだ質問とかしないようにって、言っとくね。

>よろしく願いします……。

それをそのまま、昴くんが家に帰って来てから、伝えると、

「え……？いろんなこと聞き出して、楽しもうと思ったのにな」

と、がっかりしていた。

「す、昴くん。悟くんは芸能人だからいいとしても、葉月ちゃんはさ……」

「はい。わかってます。なるべく、聞きません」

「うん。そうだよ。昴くんがあとで、葉月ちゃんから怒られちゃうからね」

「あ。そうだよね。たまに、おっかないもんね、葉月ちゃん……」

え？おっかないって思ってるんだ。ふうん……。

「ひ……か……り……」

いきなり昴くんが後ろから抱き付いて、甘えてきた。

「何？どうしたの？」

「今の撮影、めっちゃハード…」

「え？」

「テロやっつける役、めっちゃ大変…」

おや、めずらしく弱音？

昴くんはしばらく黙って、私に抱きついていてた。

「ああ…。ひかりって、ほんとあったかいし、癒される、俺…」

なんだか、可愛くなって昴くんの方を向いて、頭をなでなでしてみた。

「頑張ってるんだね」

そう言つと、昴くんはこっくりとうなづいて、

「ワン…」

と言って胸に顔をうずめてきた。

これ、多分、もつとなでてってことだな…。心の中で、よしよしって言いながら頭をなでると、

「く〜ん」

と小さな声で昴くんが鳴いた。…ほんとに、犬になっちゃうんじゃない？

翌日、昴くんはまた朝早い。眠そうな目をこすりながら、マネージヤーが迎えに来たから、行ってくるよって言っ、ハグしてキスして家を出た。

撮影がずっと続き、そのままラジオ局に直行するらしい。大変だ…。夜、11時になり、ラジオが始まった。先週はこれに出てたなんて、なんだか信じられない。他人事みたいだ。

「天宮昴のミッドナイトデート！今日で2回目です。こんばんは。みなさん、お元気でしたか？」

昴くんの声は澄んでいて、光が飛び出していた。さすが、昨日の夜うなだれて、甘えてきた人と同一人物だとも思えないほどの変わりよう…。

「さて、今日のゲストは…、俺もすごい尊敬してるお兄さんの存在の、俳優さんです」

と言っ、てから、少し間をおき、

「誰だか、わかりますか？もう、みんな喜びますよ…。そう、結城悟さんで…す！」

それから、パチパチと手をたたく音がした。きつと、昴くんが拍手してるんだろう。

「どうも…。結城悟です」

悟くんが少し、大人しめに低い声で挨拶をした。

「あ〜。悟さん！今、思い切りホットな話題の…」

「昂！いいの、それは…」

いきなり、そんなトークを二人でしだした。

だ、大丈夫？昂くん、暴走しないでよ。きっと葉月ちゃんがドキドキしながら聞いているんだから。

「大丈夫、大丈夫」

え？ラジオしながらも、私の声聞こえるの？っていうか返事をするほど、余裕？

「まあね」

…ほんとだ。今日はまったく緊張していないみたいだ。

「さ〜て、リスナーのみなさん、悟さんに聞いてみたいこと、どんどん質問寄せてくださいね」

「はは…。なるべくお手柔らかにね」

悟くんは力なく笑った。正反対に昂くんは、どうもハイテンションだ。

「ああ、早速きた！えっと…。あ、やっぱり写真で一緒に写ってる

人は、本当に彼女なんですか？って質問だ」

「一応……」

「え？一応って何？」

「一般の人だから、なるべくノーコメント」

悟くんは、口数が少なかった。

「はい。じゃ、次ね。あ、でもな……、これもそんな質問だ。その彼女とはどこで知り合って、付き合ってたのくらいですか？あ、次のもそうだ。彼女は今、何歳ですか？タイプで言うと、どんなタイプですか？」

「……」

悟くんは黙っていた。

「あとね、こっちの人は、彼女のどこが好きですか？だって」

「あ……。他には？っていうか、お前に質問とかないの？」

「ないよ。ずっと、悟さんばかり。ま、しょうがないよね、昨日の今日じゃ」

「なんで、お前のラジオに出る前に、撮られちゃったんだろ、俺」

悟くんは、少し困った感じでそう言った。なんか、今日の悟くん、いつもと違うみたい。

「俺が撮られたときも、すぐにラジオ出演したんだよね。で、暴露しちゃった〜」

「そうだったけ？」

「うん。あ、悟さん、まったくさっきから、答えてないけど」

「質問に？」

「そうです」

「…えっと、なんだっけ？ああ…。どこで会ったかだっけ？舞台上です。観に来てくれてた…」

「はい。それから、いつから付き合ってたのかって」

「いつだったかな？お前がひかりさんと付き合いだして…、そのあとだから…」

「悟さん！！！！」

「え？」

今、ひかりさんって言っちゃわなかった…？

「あ〜。俺、言っちゃったっけ？名前…」

「言っちゃいましたよ…。あ〜あ。生放送で…」

「ごめん！」

「いや、俺に謝っても…。多分本人のほうが、今頃怒ってる…」

「怒ってる？ごめんなさい。名前ばらしちゃった…」

『怒ってないけど…。かなり、ショック…』

「怒ってないけど、ショックは受けてるかも」

昴くんは私の心の声を聞き、悟くんにそう言った。

「申し訳ない！つい…」

「…ま、いいやもう。言っちゃったものは仕方ない。生だから、力
ツトもできないし」

「悪い、本当に悪い！」

ラジオから黒い霧が出た。どうも、悟くんが罪悪感を感じて霧を出
したようだ。めずらしい。

「あ。ほんと、いいよ、いいよ。もうこうなったら開き直ろう。ね
？ひかり！これ、聞してる？もういいね！」

あ……。昴くん。いいけど…。昴くんが思い切り、光を出して、
霧を消してるし…。

『いいよ。でも、本名全部は言わないで』

「名前だけね。ばらすの…。あとはもう、言わないでよ。悟さん」

「はい。言いません」

「じゃ、次。彼女のどこが好きですか？って質問」

「え…。そうだな…。えっと、健気なところかな」

「健気？」

「弱かったりするのに、強がってたり…。一生懸命に生きてたり…」

「うん」

「そういうところがいじらしいって…」

「ふうん。そうなんだ」

「でも、俺の前だと、そんなに強がらないかな」

「悟さんには、素を見せられるんじゃないの？」

「うん、そうかも」

「仲いいんだな〜」

「お前もでしょ？」

「俺？俺はいいの。もうこれ以上話さないからね。俺にふらないでくれる？」

なんか、ラジオだって自覚二人はあるのかな…。いつもみたいな話し方になってるけど…。

「次の質問。今のドラマで刑事役やってるけど、悟さんは子どもの頃、何になりたかったですか？」

「あ。良かった。そういう質問で…。俺は、芸能人になる気はなかったですよ。ほんとに小さい頃は、パイロットとか、宇宙飛行士とかになりたかった」

「へえ。そうなんだ」

「昴は？」

「俺は、この世界にもう、小学生からいるから。なんか、気づいたら俳優してた」

「あ。そうか…」

「次の質問、いいですか？今日はどんどん聞いちゃいますよ」

「うん」

「結婚は何歳ごろしたいですか？」

「結婚？！うーん。唐突だな…。まあ、30くらいまでには…」

「何人子どもが欲しいですか？」

「子ども?!考えたこともないけど…」

「じゃ、亭主関白になるか、尻にしかれるか、どっちになると思い
ますか?だって」

「どっちもなさそう…」

「なんか、尻にしかれるわけじゃないけど、優しいだんなさんにな
りそうだよね」

「俺?そう思う?」

「うん」

「お前は思い切り、甘えそうだよね」

「え?」

「奥さんに。べたべた甘えていそう…」

「だ〜から、俺のことはいいんだって」

「はいはい」

「次は、なんだ。俺にだ…。先週空野さんが、自分の好みだと言っ
て、ひかりさんに怒られませんでしたか?。ああ、もう名前し
っかりと書いてあるし…」

昴くんは少し、黙ってから、

「怒られませんでした。ひかりは寛大ですから。じゃ、次」

と早口で言って、次の質問にうつろうとした。でも、

「またか……。これも俺にだ……」

とちよつと、低い声でそう言った。

「はは……。今度は昴が質問攻めにあう番だ」

悟くんがひやかした。

「ひかりさんの字は、どう書くんですか？私もひかりなんですけど、お日様の光っていう字に、里です」

「ふうん」

「えつと、字ですか……？そこまでは教えられません。すみません。あ、光っていう字に里、いいですね。光のふるさとみたいで……」

昴くんはそう、優しい声で言った。

「パソコン俺も見えていい？質問見てみたい」

「あ。いいですよ」

悟くんがメールを見ているようだった。

「こんな質問もあるよ。昴くんはひかりって呼んでるんですね。ひかりさんは、なんて呼んでいますか？」

「昂くんって呼んでます」

昂くんが答えた。

「菅原エリカさんのラジオにゲストで出てた時に、昂くん、彼女に甘えてるって言ってましたよね。今でもそうですか？」

「はい、そうです」

昂くんは、悟くんが読む質問に、冷静に答えていた。

「彼女は年上だけど、そう感じないようなことも言っていましたよね？年齢の差を感じることはないですか？」

「はい、ないです。あれ？まったくないかも」

昂くんがそう答えた。

「悟さん、俺のはもういいです。せっかく悟さんがゲストで来てるんだから。あ、そうだ。歌のリクエストありますか？」

「ああ。うん。俺が好きな歌は、ちょっと古い歌なんだけど…」

「あ、いいですよ。なんて曲ですか？」

「親父が好きで、カラオケに行くとよく、歌ってたんだよね。アリスのチャンピオン」

「あ、ボクサーの歌」

「そう。なんか、あれ、好きで…」

「じゃ、それ、かけます。アリスのチャンピオン」

曲が流れてる間に、

『ひかり、悟さんが本当に悪かった、ひかりに謝っていたって伝えてって』

『うん、もういいよ。言っちゃったものは仕方ないもの』

『じゃ、ひかりは怒ってないって伝えておく』

『うん』

なんだか、昴くんに釘を刺すより、悟くんに注意するように葉月ちゃんに言っとけばよかったな。

「悟さんのことをいろいろと聞こうとしてたのにな…。いろんなことを聞き出そうって思ってたんですよ。暴露させちゃって。そして、逆に俺の方が困ったことになっちゃいました」

曲が終わると昴くんがそう言って、でも明るく、

「あはは。まいった」

って笑った。

「すまない、昴。ほんと悪かった」

「いいすよ。俺の彼女超優しいから、大丈夫です」

「あ…、そう。のろけ？」

「はい！」

もう…、昂くんったら、何を言ってるの！

「それじゃ、悟さんも新番組始まったんですよね。刑事役の…。忙しいと思いますが、お互い頑張りましょう」

「ああ。うん。昂も、ラジオにドラマ、いろいろと忙しいだろうけど、頑張って」

「ありがとうございます。じゃ、また、遊びに来てください」

「おお」

「今日のゲストは、結城悟さんでした」

昂くんがそう言つと、CMが流れた。

は……。なんか、ラジオ聞いてるだけで、私が緊張しちゃった。

CMがあけるといきなり、昂くんは、静かで穏やかで、優しい声になり、

「悟さんと彼女、ずっと幸せだったらいいな…なんて思います。あ、彼女は一般の人だから、みなさん、あんまりさわりだりしないで、

あつたかく見守っていませんか？なんて…。いろいろと聞き出しちゃえって思ってた、俺が言つのもなんなんですけど…」

と話し出した。

「俺の彼女も、あ。もう名前ばれちゃいましたね。そう、ひかりっていうんですけど…。芸能人じゃないし、騒がれるとちょっと困る。できたら、あつたかく見守ってくれたら嬉しいです」

昂くんはちよつとだけ黙ると、

「次は、俺の好きな歌かけようかな…。ゆずさんの歌で…。虹。けっこう好きなんですよね。これ」

あ…。私も好きな歌だ。よく家で、ゆずの曲を昂くんは聞いてて、一緒に口ずさんでるんだよね。

歌が終わり、

「あ、そうだ。来週はまた、空野いのりさんがゲストで来ます。質問、相談があつたらどんどん、送ってください」

昂くんがそう言つと、CMが流れた。

そして、またCMあけ、すごく優しい声で昂くんは話し出す。それと共に、すごい光が飛び出してくる。

「俺、思ってますけど…。好きな人、大事な人がいるってだけでも幸せだなんて。あ…。それは恋人に限らずですよ。両親や子ども、兄弟、友達…。俺、家族も、両親なんて特に、大事だなんて思いま

す」

昴くんの声は、本当に優しくかった。

「正月休みに、いろんなことを体験して、命の大事さを知ったり、親のありがたみを知ったりしたんですよ。なんか、すごい親に感謝したり、自分の命をもっと、大事にしないとなって思ったりもしました」

昴くんは、まじめな話をし出していた。でもこれ、昴くんが伝えたかったことだ。

「みなさんには、いますか？ 大事な人…。大事に思われていない、愛されてない、って孤独に感じてる人、そんな時には、愛している、大事に思っているって方を、感じてみてください。求めるよりも、与える方、愛されるよりも、愛する方…。これを感じるだけで実は、幸せになれます。心が満たされるんです。求めると、逆に失ったとき、けっこう穴がぼかりとあいた感じがしたり、求めて満たされてもまた、多くを求めたりして、心に隙間があくんですよ」

昴くん…。

「でも、愛するってすごいですよ。こんこんと湧き出ますから。枯れないですよ。もっと多く、もっと愛そうって思ったら、さらに湧き出ますし。それが自分の中で、思い切り溢れ出て満たされて、幸せになれます」

そうだね…。本当に…。

「だから、愛されようとするより、愛してください。きっと、それ

が1番の幸せなんだって、気づくと思います」

ラジオからものすごい光が出た。それが辺り一面に広がる。

「なんて、俺、ちょっと生意気言っただかな？」

昴くんはそう言って笑うと、

「今夜も、みなさんとのミッドナイトデート、楽しかったです。みなさんも楽しんでもらえましたか？また、来週この時間に会いましょう。それでは、いい夢を」

そうか。ミッドナイトデートって昴くんとリスナーのデートなのか…。って今ごろ、気がついたよ。

それにしても、昴くんから出る光すごかったな…。これを聞いてた人は、思い切り癒されたんじゃないかな…。

7 これもミッション

また、昴くんのブログにたくさんコメントが寄せられた。

>ラジオ聞いて感動したよ。愛されるのを望むよりも、愛する方なんだね。

>昴くんと、夜中にデートをしているような気になって、嬉しかった。昴くんの声って優しいんだね。

>私もひかりっていいです。ラジオでひかりって昴くんが呼んで、なんだか自分が呼ばれた気になりました。ひかりさんとお幸せに。

わ…、なんだか、嬉しいな。

「うん。みんな優しいコメントばかりだよね」

一緒に横で読んでた昴くんが、私の心の声に答えた。

昴くんは最近、番宣も終わり、撮影オンリーに打ち込めるので、落ち着いている。家で台詞を覚える時にはまたすごい集中力だけど、そうじゃない時には、ご飯まで作ってくれてご機嫌だ。

「昴くんの方が、才能あると思う」

「料理？」

「うん」

「そうかな…。俺、ひかりが作ってくれる料理大好きだけど」

「……………そう?」

「あ。もつと喜んでいいのに!あはは…。心の中じゃ、すごく喜んでるくせに!」

もう、わかってるなら、いいじゃないよ…。

「ひかりさ」

「うん?」

「最近、ちよつと…」

「え?太った?」

「あ。聞こえた?心で言ってみただけど…。幸せ太り?」

「違う…。あんまり運動もしてないし、それなのに、ばくばく食べてるからだ。わ…、ショック」

「いや、いいんじゃないの?ほら、正月すごく痩せちゃったし。ちよつとよくなってきたのかも」

「……………」

「え?慰めじゃないって。ほんとにそう思ってるよ?」

「……………」

「だから……。俺の心の声も聞こえるでしょ？嘘ついてないから！」
じゃ、太ったんじゃないかなんて、言わないでよ。

「ごめん……。失言でした。ただ、ちょっと気になったものだから」

「何が？」

「ええつと……。もしや、赤ちゃんが……とか？」

「え？！ない。それはないよ」

「だよね……」

そんなこと思ってた？あれ、また隠してない？だって、昂くんの心の声聞いてても、それは読めなかった。

「あ。俺も無意識に隠してたのかな……」

「人のこと言えないじゃん」

「ごめん……」

昂くんはそう言って、抱きついてきた。

『いいよ。素直に謝られたら、怒る気にもなれない』

『やっぱり、ひかりって超優しい』

もう……。またそんなこと言う…。

「ラジオ楽しみだね」

「え？」

「光をいっぱい出しちゃおうね」

「うん」

そして、ラジオの放送の当日がやってきた。

「天宮昴のミッドナイトデート！こんばんは。みなさん、今日も一緒に俺と、デート楽しんでください！」

昴くんの元気のいい声から、始まった。提供を言うとCMに行く。

「き、緊張…」

昴くんの前の席で緊張していると、

「だ・い・じょう・ぶ！」

と昴くんが、口だけを動かして、それからピースをした。私は、こくんとうなづいた。

CMがあけるとまた、元気に昴くんが話しだした。

「1週間どう過ごしてましたか？俺は今、ドラマの撮影を毎日して

います。みなさん、観てくれますか？テロを阻止するために動く役柄なんです、スタッフや役者さんたちとは、和気あいあいとしながら、撮影をしています」

昴くんの顔を見ながら、奇麗だななんて見とれていると、

『そんな、見とれてないで』

と心で言ってきた。あ…、照れてる？

「えっと…、でも役がすごいクールな役で、シリアスな場面ばかりだから、それを引きずって休憩中も、シリアスモードになったり、クールな俺になったりもしてて…。あはは。そんな時には、一緒に出演してる俳優さんとも、会話がなくなったりして…」

昴くんは笑いながら、話を続けた。

「で、いつもはおちゃらけキャラだから、そのギャップに自分でついていけなくなって、力尽きて、家に帰ることも多くて…」

そうそう。それで思い切り甘えてくるんだよね。

「で、彼女と会う時にも、そのまま力尽きた状態で会ったりして…」

え？何を言い出すの……？！

「で、そんな時思い切り俺、甘えています。そうして充電して、また翌日すごいパワーで仕事ができる」

す、昴くん。最初から何を言ってるんだ…。

「なんて日々を過ごしてるんですけど。あはは…。前に座ってる空野さんが、呆れた顔してる。すみません。最初からのろけてて…」

『えへへ…』

えへへじゃないよ…。もう…。顔が熱い。

『あ、照れてる。。。！』

『私で、遊ぶな。。。！』

「あはは…。今日も、ゲストで空野いのりさんが来てくれます。よろしくお願いします」

「はい。こんばんは。よろしくお願いします」

「すみません、のろけで始まって」

「いいえ……」

「あ。呆れてますか？」

「ちょっとね」

「先週は悟さんだったんですよ、ゲスト。聞いてくれてましたか？」

「はい、家で」

「もう、悟さん、自分のことであんなにばってて、俺の彼女の名前ばら

しちゃったの」

「あ、そうでしたね」

『なんで、そんなことを私にふるかな〜』

「今日もたくさんの質問や、相談が来てるんです。空野さんにも来てますよ」

「あ、はい。嬉しいですな」

「ですよ。俺のブログにも感想や、コメントがたくさん来てて…」

「私の小説のサイトにも来ています」

「あ、空野さんのブログが出来たんですよ？」

そう、無料の小説サイトから抜け、独自のブログを作ったんだよね。

「はい」

「俺、読んでますよ。でも、あんまり更新してないですよ〜」

「そうですね…」

だって、何を書いていいのかわかんないもん。

「では、早速、質問から。えっと…？」

昴くんは手元にある、パソコンから打ち出された用紙をながめた。

『なんだ、俺にばかりじゃん』

「あ、すみません、寄せられた感想とかを、ちょっとここで紹介していいですか？」

「はい、どうぞ」

「先週の放送聞いていました。悟くんと昴くん、お二人は仲良しなんです。話を聞いててそう感じました。悟くんは昴くんの彼女のことを知ってるんですよね？昴くんも悟くんの彼女のこと知ってるんですか？」

読み終わって昴くんは、何を言ったらいいんだって考えていた。

「うん、知ってます。会ったこともあります。でも、ここであればらすと、あとで悟さんから怒られちゃうから、俺からはなんにも、言えません。あ、悟さん、彼女の名前ばらされたからって、俺もばらしてやろうなんて、そんなこと考えてないから安心してください」

そう言うと、ブースの外のディレクターたちが、笑っていた。

「悟さんとはほんと、仲いいです。兄貴みたいな感じで、なんでも相談します。すんごい頼りになるんです」

昴くんは、嬉しそうにそう話した。昴くんが話すと、きらきらすごく綺麗な光が飛び出る。それに包まれると、すごく幸せな気持ちになる。

「次のお便りは…。私もひかりといいます。それに年も29歳です。職場で、もしかして昴くんの彼女なんじゃないの？と聞かれてしまい、違う違うと否定しましたが、昴くんの彼女も周りにいろいろと言われてないですか？大丈夫ですか？彼女が羨ましいけど、あまり周りの人にさわがれず、昴くと幸せにいて欲しいです」

「わ…」

思わず嬉しくて、言葉が出てしまった。

「え？」

昴くんに聞かれた。

「あ、いえ。すみません。優しい方だなんて思っちゃって…」

「ですよ。でも、こういうメッセージ俺のブログにも多いです。俺のファンの人たち、みんな優しいんですね。すごく」

「ありがたいことですね」

「うん、本当に。すごい感謝してます。みなさん、ほんとありがとうございました」

「でも、昴くんがきつと、ファンの人たちを大事にしてるから」

「え？」

「そう思いますよ。私の友達も昴くんの舞台を見に行ったりして、それを感じたって…。あ、先々週ラジオ局の入り口で、昴くんのフ

アンの子がいて、昴くんばったり会ったら、その人たちに丁寧に話をして、にっこりと笑顔で接してて…。そういうの、いっつもしてるでしょう?」

「…はい」

「ファンの人たち、それ、すごく喜んでると思います。昴くんってすごいよねって、昴くんのファン仲間がよく話してるんだ」

「フ、ファン仲間?!」

「そう、けっこう周りにいるんです」

『誰?』

『葉月ちゃんや、真知子ちゃんや、珠代ちゃん』

『だ、誰? 真知子ちゃんって? あ、あとで話して』

『うん』

「えっと。そういうのは、特に意識してるわけじゃなくて…。でも、俺が逆の立場だったら、そうしてもらえたら嬉しいし。それに、長いこと待ってくれてたり、遠くから来てくれてたりするじゃないですか。冬なんて寒い中、顔も耳も真っ赤にして待っていてくれると、なんだかそれだけで、俺感動しちゃって…」

「そうなんだ」

「うん、でも、どうそれを表現していいかわからないから、とにかく

く喜びを表したいなって、それは思ってます」

「そういうところがすごいよね」

「え？そう？当たり前のことじゃない？」

「そっか。昴くんには、当たり前のことなんだね」

「う、うん。あれ？俺だけ？」

「ううん。そういう相手のことを思うことが出来るって、すごいことだけど、きっと昴くんはずっとそうして育ってきたんだね」

「そんなこともないけど…。この世界入っているといろいろと経験して、一人じゃやっていけない世界だし、ファンの人あつての俺だしって思ったら…」

なのに、私が後遺症残るかもって心配してた時、俳優やめようと思ってくれたんだ。そう心で思っていると、昴くんは私を優しく見つめた。

「あ…。そういえば、俺のブログに先々週、彼氏が病気で瑞希みたいに思えないっていうメールをくれた人から、コメント入っていたんだ」

「うん」

「俺も好きな人を亡くした経験があるんですかって質問だったけど、それに答えますね」

ああ。そうだ。そういう質問だったよね。

「俺も好きな人、病気で危なかったことがあって。だけど、助かったんです。その時、死ぬかもしれないって思った時、すごく怖くて、不安で…。いなくなったらどうしようって思った」

「……………」

そうだった…。昂くん、ほんとに辛そうだった。

「だけど、とにかく愛を送ってた。愛を送ってたっていうか…。うん。それが1番びったり来る言葉かな、やっぱり」

光で包んでくれてたんだよね。

「愛してるってずっと心で思って、そばにいたんです。それって伝わるみたいで、その人、元気になって…。あの時、本当に感謝したっていうか、その人の存在のでかさを思い知ったっていうか…」

わあ。やばい、泣きそう…。

『って、泣いてるよ、もう。目、潤んでる…』

『え？ほんと？』

「それで…。命の大事さとか、死ぬこと生きること、いろんなことを学んだっていうか…。どの命も、もちろん俺も含めて、大事ななっと思ってたんですよ」

「……………」

私も思った。

「向き合うことつらいと思います。でも、愛をその人に送り続けてください」

昴くんはそう、静かに言った。

いったん、CMになり、その間、思わず出た涙を私はふいて、鼻をかんだ。

『ぷ…。泣いちゃうんだもん、ひかり』

『だ、だつて…。思い出しちゃって』

『可愛いよね』

もう……。こんな時に何を言ってるんだか…。

CMがあげると、元気に昴くんは話し出した。

「今日も、ゲストは空野いのりさんです。質問、相談、たくさん来てるので、どんどん聞いていきたいと思います」

「はい」

「まず、ラジオネームピーちゃんから。私は、今付き合つて2ヶ月の彼がいます。5歳年下です。本当は私も甘えたいけど、つい大人ぶってしまいます。どうしたら甘えられますか？」

「え？」

「っていう相談。空野さんは、男性に甘える方ですか？」

「私ですか？ど、どうかな…。あんまり甘えるのは得意な方じゃないかな」

「そうなんだ」

「うん。多分…」

『そうかな？けっこう最近甘えてくるじゃんか…』

『え？そう？』

「じゃ、もしかして、甘えてこられる方とか？」

「あ、そうかも」

「甘えるにはどうしたらいいですかっ。どう思います？」

「そのまま、素直に甘えてみたら？」

「あはは…。ごもつとも。俺もそう思います。あ、続きがあった。昂くんは、どんなふうに彼女に甘えてますか？だって…」

『ばらすの？』

「えっと…。そうだな。あ、やつぱり、ノーコメント。のろけになるから、やめときます。空野さんにまた、呆れられるから…」

『てか、ひかりの目、怖いから』

『え?』

「次の質問ね。空野さんは彼、いますか?結婚はしてますか?」

「内緒です」

「もし、彼が浮気したらどうしますか?私の彼は浮気してます…だって。匿名希望さんからです」

「そうだな。うーん?どうするかな。ショックを受けるかな。でもやっぱり、それでも好きでいるかな」

「やきもちやき?」

「私?」

「うん」

「そ、そうかも」

「ふうん…」

『なんで、聞くの?』

『へへへへ』

へへへじゃないよ……。もっ……。…。

「次はね、俺にです。昴くんの彼女は、29歳ですよ。結婚考えてないんですか？私は今、30で、結婚焦っています。この人も、匿名希望さんから…。うーん。そうです、29歳だけど、結婚はあまり、考えていないようです」

「今は、結婚適齢期もない気がするな」

私が言うと、

「あ、そうかも。結婚したくなった時が適齢期なんじゃないかな」

「男の人もそう？」

「うん。さすがに俺、まだ、結婚って意識したことないけど…。空野さんは、あまり結婚に縛られたくないって言ってましたよね？」

「うん。25歳ころは焦ってたけど、今は特に…」

「ふーん、そうなんだ」

「次の質問は、今、結婚を考えてる人がいます。すごく幸せな毎日です。でも、それがいつか壊れるんじゃないか、失うんじゃないかって、怖いんです…。ラジオネーム、昴くんのダイダイファンさんから」

昴くんは一瞬黙ってから、

「でも、今は幸せなんですよね？」

とぼつりと言った。

「そうだよね…」

「だったら、何も先の心配しないで、幸せを思う存分かみしめてたらどうでしょう？つて、思いませんか？空野さんも」

「思います。今、何を感じているか、そこが大事だっと思うし」

「うん、今幸せなのに、未来のことで不安がつてるなんて、もったいないですよ」

「そうだよね」

「次は、ちょっと深刻な悩みって言うか…。匿名希望さんからです」

「はい」

「今、すごく辛くて、死にたいです。実は、赤ちゃんが死産しました。夫は、励ましてくれますけど、どうしても、立ち直れません。悲しい気持ちが消えません。生きててもしょうがないっていうか、赤ちゃんに申し訳なくて、しかたありません。どうしたら立ち直れますか？」

「……」

前の私みたいだ。

「もしかして、赤ちゃんが死んだのは、自分のせいだって責めてるのかな？」

「……」

私はしばらく黙っていた。

『ひかり?』

「私も、流産したことがあります」

『え?!』

「8ヶ月でした。ショックでした。それから、離婚して…、3ヶ月家に引きこもってました」

『そんなこと言っているの?』

「私が体験したことが、励ましになるなら、話してもいいかと思っています」

『ひかり…』

「今、もとだんなさんには奥さんがいて、お子さんがいます。女の子と男の子と…。生まれましたという葉書を送ってくれました。写真つきの…。すごく可愛い赤ちゃんでした。離婚してしばらくは、恨んだし、赤ちゃんを流産した時には、自分を責めました。なんかもう、すべてが真っ暗で…」

「……」

昴くんは黙って聞いていた。

「でも…、今は、父や母や兄とも、すごく仲が良くて…。みんなが幸せになることを願っててくれて…。それはもとだんなもです。辛い日があった分、幸せというか、家族のありがたみや、大事さを感じられてます」

「うん、そういうのわかる、俺も…」

昴くんは、次元の低い自分のこととだぶらせてるようだった。

「だから、今は辛くても、きっとその体験も、喜びや幸せを感じるために起きていたことだったって、感じる日が来ると思います。すべてが、起きることのすべてが、必然なんですよね」

「それに、だんなさんが励ましてくれてるって、それ、すごく幸せなことですよ？それ、感じてますか？ちゃんと…」

昴くんがそう話を続けた。

「辛いかもしれないけど、ちょっと周りを見てください。きっと、あなたのこと大事に思ってくれてる人はいます。あ、もしそれでも感じられなかったら、それも心配したり悲しんだりしないで大丈夫。なんて言えればいいのかな。宇宙っていうのかな。それはあなたのことを、生まれたときから見守ってて、愛してくれてて…。だから、自分が不幸だなんて思わなくてもいいんですよ」

「うん」

「幸せだって思って、周りを見てください」

「……」

「赤ちゃんのことも、自分を責めないでください」

「うん。そうだよね」

昂くんと私から、すごい光が出ていた。感じてくれるだろうか。この光と、そして、自分自身が愛された存在だということ、ううん。愛そのものだということを…。

「俺が言いたいの…、みんな、愛されてる、素晴らしい存在なんだったことなんです。空野さんの2012年 愛と光の地球にも、そういったこと書いてありますよね」

「うん」

「だから、みんな大丈夫です。存在そのものが愛されてて、愛そのものですから」

「うん」

「わかってもらえましたか？わざわざ、苦しむことを選ばなくてもいいですよ。幸せになることを選んでいいんですよ」

「そうだよね」

「だんなさんと、また、前を向いて、幸せな人生を歩いてください」

「うん…」

「すぐ、幸せになれます。幸せだっと思えば、もう、なれます」

「でも、もし辛くてすごく泣きたかったら、泣いてもいいんだよね？」

「あ。そう、もちろんです。我慢しないで、泣いてすっきりさせていいんですから」

昂くんからは、ものすごく綺麗な光が出ていた。それが私の光と混ざり合い、宇宙へと放射される。

「大丈夫。大丈夫ですから…」

昂くんの声はあたたかく、優しく、でも力強かった。

あつという間に、私が出るコーナーが終わった。30分以上は、私、昂くんと相談に乗ってたんじゃないかな。

曲を2曲続けて入れて、CMにいき、CMがあげると、また昂くんはすごく優しい声になって、

「今日も、空野さんにゲストできてもらって、いろいろと話をしてもらいました。なんか、前で聞いてるだけで、俺も癒されました。みなさんはどうですか？」

昂くんはブースの外にいる私の方を優しく見ながら、話していた。

「空野さん、自分のことは秘密にしてたのに、あんなに話してもらって、悪かったって言うか、感謝って言うか…。だけど、空野さんの体験が、みなさんを力づけることになるのなら、俺も嬉しいです」

ちよつと黙つてから、

「俺、空野さん尊敬しちゃいます。あ。もともと尊敬してましたけど、もつと…」

つて笑つて言つた。

「大人な人でしょ？寛大だし、優しい。すぐそばにいとね、きつとみなさん感じると思ふけど、すんげえあつたかいエネルギーを持った人なんです」

『ほ、褒めすぎだつて！』

「今も、話聞いてて、照れてるようですけど…。そういうところは可愛いって言うか…。あ、これ以上言うのやめよう。あとで、怒られるかも…」

『怒んないよ〜』

「あはは。嘘嘘。優しいから怒らないですね。さて、そろそろ時間になりました。今日も俺とデートしてくれて、ありがとございませう」

昴くんはひと呼吸置いて、

「では、素敵な夢を見てくださいね。おやすみなさい」

と優しい声で言つた。ラジオの向こうで聞いてたら、その声だけで溶けてるな。私…。

8 真実の告白

放送はまた反響があり、特に私の体験の話に対する反響がすごく、そのうえ、そのことは週刊誌などにも載ることになった。

ディレクターからの提案で、2〜3ヶ月私と昴くんが相談コーナーをすることになり、ゲストの時間が短縮された。

「わ、私、もしかして、毎週出るの？」

「そういうことだね」

ディレクターからの電話を切ってから昴くんに聞くと、にっこりと笑いながらそう言われた。

「うそ……」

「これもミッションでしょう？」

「……」

こんな展開になるとは…。

その頃、白河さんが本を出版して、これまたベストセラーになり、もう1冊本が出ることが決まっていた。

「流れがすごいね、今」

昴くんが言った。

「目覚めてくる人も、ますます増えたんじゃない？」

「かもね」

私と昴くんの相談コーナーのアドバイスなんて、どこからどう聞いても、わけのわからないこと言ってるだらうなって思っていたけど、反響を呼んじやったし、白河さんの本を読んだけど、目覚めや、この宇宙の真実をあからさまに書いた本で、それがベストセラーになっってしまうんだから、世界が変わってきてるってことだよな。

翌日、買い物に行き、帰りがけコンビニになんとなく入って、週刊誌を見ると、

「空野いのり、流産と離婚をラジオで告白。天宮昴の恋人も、流産と離婚をしていたことが昨年明かされたが、同一人物か？」

と書かれていた。

ドキ！！！何これ？っていうか、私が離婚して流産したってのは、どっかの誰かが勝手に調べて、勝手に明らかにしちゃったんじゃない！

「ひかり！」

「昴くん？」

「あゝ。テレビ局入るときにとっつかまった。空野いのりは実はひかりさんではないですかって、レポーターが…」

『週刊誌にも載ってるよ〜』

『まじで〜？どうにか、まいたけど、まだ、これからもつつかまるかも。どうする？』

『どうするって…』

『ノーコメント、答えられないって今日は言っただけ』

『しばらくそうしておいて、まだ、どうしていいか、頭真っ白』

『わかった。そうだね、明後日ラジオだしね…。その時まで、黙っておくよ』

『うん』

は〜。やっぱり、正体ふせておくなんてできないもんなのかな。まあ、ふせておく必要もないってことかもしれないけど。

昴くんは、3日に一回くらい、ブログを更新していた。

>今日もドラマの撮影でした。朝早かったり、夜遅い撮影はだんだん冷えてきて、そろそろばっちり防寒しないと…。そうだ。この前、ファンの方から、あったかい帽子をもらいました。すごいあったいです。ありがと〜〜！

その帽子をかぶってる昴くんを写メで撮ったあげて、それを載せた。すぐにコメントが入り、どうやら、その帽子をあげたファンの子らしい。

>私があげた帽子をかぶってくれて、すごく嬉しいです！

そっだよね、そりゃ、嬉しいよね…。

週刊誌のことでも、やっぱり、

>空野いのりさんって、ひかりさんなの？

ってコメントがたくさんあった。昴くんは、レポーターの質問は、ノーコメントに出来ても、ファンの子からの質問は、ほっておけなかったらしい。

「あ~~~~。まじ、どうしよう~~~~！」

相当悩んだあげく、

>今度のラジオで、真相をお話します。

と書いてしまった。

「え？」

それを見て、びっくりすると、

「ごめん、ひかり……」

としよぼくれた顔で、謝ってきた。

「……」

無意識に私が思ってたことを感じ取り、

「ひかり。ありがとう〜」

と抱きついた。

「あ、あれ？私今、なんて思った？」

「しょうがない。昴くんは嘘ついたり、ごまかすの嫌いだもんねって…」

「……」

そうだよ、うん。それを知ってるから、何にも言えない。

「ひかり〜！」

また抱きついてきた。

「こうなったら、一緒に暮らしてることも…」

「え？」

「ばらしちゃ、駄目？」

「駄目！」

「ちえ〜〜」

ちえ〜っつて…。

そりゃね、私もそれすら、ばらしちゃったら、楽だと思うの。だって、マンションの近くで一緒に買い物とか、外食とか、まったくしてないし、私、いつも駐車場の方からこっそりと、マンション出て行ってるし…。もっとどうどうとしたいなって、思ったりするもの。

「でしょ?!」

「けどまた、さわがられる…」

「じゃ、一番手っ取り早い方法」

「何？」

「籍入れちゃうの。いつときさわがられるけど、結婚してりゃ、文句は言われないよ」

「え?!」

何言ってるの。昂くんまだ、20歳。

「十分結婚できます」

「……」

「あ、今、頭真っ白になってる?」

私は黙って、こくんとうなづいた。

「まあ、いいや。これも全部流れに任せよう」

「う、うん」

そして、ラジオ当日がやってきた。昴くんのブログは、ワイドショーでも取り上げられ、ラジオで真相を話すようですねって、司会の人が言っていた。

そんなことわざわざ、ワイドショーで報告しないでもいいのに…。

ブログのコメント欄には、

> 昴くん、ラジオ聞きますね。でも、ワイドショーや、週刊誌にいろんなことを言われたりしても、私はあつたかく見守りたいと思っています。

そんなコメントがあつて、また、二人でじゅんとしてしまった。

ほんと、昴くんのファンは優しい。

私がもしファンだったら、嫉妬したり、ショック受けたりしないだろうか。それも、一緒に暮らしてるだの、もし、結婚なんてことになったとしたら…。

「そうかな？ ひかりなら、絶対にあたたかく祝福してくれそうだよ」

「最終的にはね。でもはじめは、嫉妬しそうだよ」

フワ…。昴くんが私を抱きしめた。

「だけど、ひかりは嫉妬する立場じゃないから、もし…、なんて考えなくてもいいの」

そう言っつて、優しくキスをする。

「うん、そうだね」

次元が上がってきているこの世界。きつと、起きることも変わってくるよね…。それを信頼しよう。

夜、11時。

「天宮昴のミッドナイトデート!」

昴くんの元気な声で、ラジオが始まった。

「こんばんは。一週間どう過ごしてましたか?楽しかったですか?俺はドラマの撮影と、あと、12月頭にね、チャリティーコンサート出るようになって、その準備が始まっています。俺、ギター弾いて歌う予定。あと、明日、大学の文化祭行きます!女子大で、ちょっとドキドキもんです」

私はブースの外で聞いていた。ゲストのコーナーの方が先にあるから。今日のゲストは、一緒に共演してる女優さんだ。その人を紹介して、ドラマの撮影でのエピソードや、大変なことなどを一緒に話していた。

「でも、昴くんはいつでも、元気だよな」

23歳になる女優さんが、そんなことを話すと、

「あゝ。はい。まだまだ、若いし」

なんて言って笑った。

「え？23の私は、おばさんかな？」

女優さんに聞かれて、

「まさか！若いですよ！」

と昴くんは、首を横に振りながらそう言った。

「そつか。昴くんの彼女は、29歳だっけ」

「もう30になってます。誕生日、来たし」

う…。ばらすなよ。

「30だったら、結婚とか考えてない？私は30までに結婚したい。
あ、そうか、バツ一だっけ？」

「……」

昴くんは一瞬黙った。

「あ…。はい。その…」

「ごめん、困らせちゃった？ごめんね」

「いえ…。その…、あ～～～！すみません。收拾つかないですね。それ、あとで話しますから。今は、ドラマの話してもいいですか？」

「はい。ごめんね」

本当に昴くんは困っていたが、すぐに切り替え、ドラマの次回の予告をして、女優さんにお礼を言い、ゲストのコーナーが終わった。

CMにいつてる間に、女優さんと入れ替わり、私が昴くんの前の席に座った。女優さんが横を通るとき、私をちらっと見て、

「昴くんの彼女なんですか？」

と、けっこうクールな目で聞いてきた。

「え？」

「それをこれから話すんでしたっけ？外で聞いてます」

そう言つて、ドアを閉めた。

『な、何？』

『あのさ、噂だけど、あの人、俺のファンだったらしくて、共演できてすんごい喜んでたとか』

『え？』

『黒い霧出てたし、ひかりに嫉妬してるみたい』

女優さんから出た黒い霧はすぐさま、昴くんが消してしまっていた。
ああ。やっぱりあれ、嫉妬の黒い霧か……。

CMあけ、昴くんはちょっと声を低くして、優しく語り出した。

「ブログにも書いたんですが、真相をラジオで話すって……。今日も空野いのりさん、来てくれてるんだけど、その……、レポーターに聞かれた時には、話す気なかったんです。でも、ファンのみなさんには、ちゃんと話したほうがいいかと思って……。あ、俺、どうも隠し事や、嘘って苦手なんです。だから、彼女がいることも言っちゃったし……」

ちよつと、間をおくと、

「小説書いてた時には、こうなることなんて、夢にも思ってたなくて有名になるつもりもないし、だから、名前もペンネームで十分ってそんな感じで小説を書き出して、それも、本になるとか売れるとか映画化とか、そういうのも、そんなことになったら面白いねって話してただけで、本当にそうなっちゃって、俺ら驚いてて……」

昴くんは、私に代わって話してくれた。

「その……。だから、こうなることを想定して、ひかりは、名前をふせてたわけじゃないし、ただ、ペンネームで始めたことだし、そのまま、その名前を通していいこうかって……。ね？ひかり」

え？私？

『うん』

「あの、はい…。すみません。なんか変なことになっちゃって」

「俺と対談したり、ラジオに出たりっていうのも、予想外って言うか、まさか、そんなことになるとも思ってたことで。でもなんだか、騙すって言うか、嘘ついてたみたいになって、本当にすみませんでした」

昴くんは、真剣な声でそう言った。

「この前、ひかりが自分のことを話し出して、俺、聞いててびっくりして。だけど、自分の体験が、誰かの役に立つことならって、ひかりがそう思ってるなら、俺がとやかく言うことじゃないし…」

「うん」

「それで、俺としては、このまま黙ってたり、知らんぷりしてたりするよりも、真相をちゃんと話したいって思って、それをひかりも納得してくれて」

「うん…」

「で、今日、こうやって、お話することになりました。空野いのりって、実は俺の彼女です」

言っちゃったね。あゝ、でもなんか、すっきり。

「すっきりしました。はは…。今まで2回放送してた時、なんか変な感じだったもんね？ひかり」

「うん…」

「は〜。あ、これ聞いてる、ひかりの家族、俺の家族、関係者のみなさん、もしかして、心配かけたり、やきもきさせたかな？」

「あ…。うん。そうかも」

「すみませんでした。ひかりとも話してたけど、やっぱり何かを隠してたり、嘘ついてたり、そういうのって、結局は真実をあかさされるようになってるんだって…。そういう時代になってるんですね。ほら、いろんな悪いこと、表面に出てるじゃないですか？ニユース見てると思いますよ。今まで、隠されてたことが、どんどんあかるみになってきてるなって」

「あ、そうだね。そういえば」

「それは、組織とか、そういうものだけじゃなく、個人的なものもそうなってきたような気がする」

「個人的？」

「俺やひかり、悟さんとかもそうだけど、もっと、普通の、一般のみなさんも。家族間での秘密が、表面化されたり、ほら、本音とたてまえとかもそうじゃない？本音だけの世界になるんじゃないかな」

「みんなが？」

「だって、みんな深いところでは、つながってるから。隠していったって、わかるようになると思うよ。なんか、今回のことで、俺、それを感じたんだよね」

「そうだね、そうかもね」

「だとするとさ、やっぱり全部話したほうがいいんじゃないの？結局はれると思うけど」

「え?!」

『一緒に暮らしてることも』

『え〜〜?』

「俺、ここであること、宣言してもいい?」

「宣言?!」

『な、何を?』

駄目だ、落ち着いて昂くんの心を読み取りたいけど、まったく出来ない。ぱにくってる…、私。

「宣言じゃないか…。え〜〜と。告白?」

「告白? な、何を?」

ブースの外では、ディレクターが、目を輝かせ、その横でさっきの女優さんが、睨んでいた。

9 プロポーズ

「まじめに話すのは、これが初めて。今までも、ひかりに言ってたけど、今回は本気、超まじめ…」

「は？」

何？何を言い出すのよ？！

「俺と、結婚、してください！」

「は~~~~？！！！！！」

プ、プロポーズ~~~~？！

ラ、ラジオで~~~~？！

それも、これ、生放送~~~~！！！！！！

だ、だ、だだだ、だめだ。何も考えられない~~~~！！！！！！

「あ、頭の中真っ白になってる？」

「あ、当たり前でしょ？！！！」

思わず、そう怒鳴ってしまった。

「だって、ほら…」

だつて、ほら？

「俺とひかり、一緒にもう、住んでるんです」

う~~~~わ~~~~!!!!!!

「でも、それもずっと隠してた。あ、事務所にも」

「わ！昂くん、それ今言ってもいいの？！」

ブースの外を見ると、ディレクターはにやにやしてて、止める様子はなかった。

なんで？！

『気づいてないの？ディレクターさん、もう目覚めてる仲間だよ？』

『え？！』

そういえば、たまに光が出てたけど…。

「ひかりは、結婚とかそういうのも、こだわらないって言ってたけど。俺もそう思ってます。うん…。だけど、世間的にはそうはいかないでしょ？」

「世間？」

世間って何？必要なこと…？

「その辺をちゃんとしないと、こうやっていつまでも隠して、こそ

こそしてないとならない。だって、一緒に住んでいたって、別々に外に出たりしてたでしょ？近所で一緒に腕組んで歩いたり、買い物にも行けない。そういうのって、ちよっと寂しかったし……」

「そ、そうだけど」

「どうせなら結婚しちゃって、みんなに祝福されて、どろどろと町歩きたいじゃん」

「そ、そうだけど……」

「でしょ?」

ま、待つて。今、私たちラジオに出てて、生放送してるのよね。

「そう。ラジオに出てて、生放送中に俺、プロポーズしてます」

し、信じられない……!!!!!!

「そついう展開になっちゃった。これも必然だよ」

「え……?」

「で、返事は?」

「へ、返事?」

「そつ」

「返事?」

「だから、プロポーズの返事」

「それは…。待つて。昂くんてまだ、20歳だよ?」

「あれ?男の人って18歳で結婚できるんですよ?」

いきなり昂くんは、ブースの外にいる人に向かって聞いた。ディレクターが、にっこりとうなづいた。

「ほら、できるってさ」

「そういうことじゃなくて」

「ひかりの親も、籍は入れないのかって心配してたんでしょ?」

「そ、そうだけど。だけど、昂くんのご両親は?」

「きつと、まったく問題なし。あ、うちの親も結婚早かったんだよ。えつと、母さんが26で、父さんが22の時」

「そうなの?」

「そうだって前に聞いたことがあるよ。社内恋愛で、赤ちゃんが出来て…とか」

そんなこと、言ってもいいの?

「ひかりは、今年でもう30だよ?」

「うん。…え？もしかして私の年齢のこと、気にしてる？」

「そうじゃない。ほんと、みんなに黙って、一緒に暮らしてるのが嫌になった。そういうの隠してるのも…」

「……」

ど、どう答えたらいいの？

『素直な気持ちだけ、言ってくれたらいいよ。嫌なら嫌でもいいんだ』

『嫌じゃないけど…』

「ずっと、俺はひかりといたって思ってるけど？」

だから、これ、ラジオ！

「どうせなら、ファンのみんなが聞いているところで、プロポーズしちゃえて…」

「なんで？」

「祝福してもらいたいから」

「……」

そんなこと言われたら、断れない…。

「断るつもりでいた？」

「…ううん」

「だよね？」

「だよねって何？」

『だって、心の中じゃ、もうひかりもOK出してたよ』

『え？無意識に？』

『そう』

「じゃ、OKなんだよね？」

「昂くんはそう言ってきた。」

「…はい」

「やった～～！」

「昂くんの喜ぶ声と共に、ブースの外にいるスタッフも、大喜びしていた。あ、女優さんはいつの間にか、姿が消えてたけど。」

「あはは…。もしかして、前代未聞？ラジオの生でプロポーズ…」

「そっだよ～～。もう～～～！！！」

「あ、怒ってる？。」

「呆れてるの！」

「あはは…違うでしょ？照れてるでしょ？ひかり、真っ赤だもん」

「う、うるさいよ、もう〜」

「あ…。ディレクターさんが何か言ってる…。え？パソコン？あ、メールのことか」

パソコンでメールをチェックし始めると、たくさんのメールが届いていたのがわかった。

「わあ。すんごいたくさんの、おめでとうメールが届いてた。すげえ、嬉しい。まじ、嬉しい！」

昂くんが喜ぶと、思い切り光が飛び出てダンスをした。ブースの外を見ると、ディレクターさんからも光が飛び出ていた。

「あ…。これ、悟さんからだ。おめでとう、とうとうやったなってさ」

「え？悟くん？」

「他にも、知ってる人からもぞくぞく来てます。みなさん、ありがとうございます。あ…。もしかして、明日いきなり、記者会見とかかな？ひかりも一緒に出るのかな？」

「私は遠慮しておく」

「う〜ん。そうなるかな。どうかな。一般と言っても、ひかり、

しつかりもう作家だし。有名人だし」

「え〜〜？」

嘘！

「あはは…。ま、いいじゃん。一緒にのろけまろうよ」

す、昂くん〜〜！！！！

それから、FAXも、メールもどんどんやってきた。ほとんどがおめでとうメール。ひやかしのメール。中には、羨ましいとか、シヨックっていうのもあったけど、それでも最後には、祝福しますって書いてあった。

昂くんが、みんなに祝福されたいからなんて言ったら、みんな祝福するしかないよね？

「あ〜〜！これでどうとうと、一緒にマンションのエントランスから出れるね。近くのスーパーにも買い物に行けるしっ！」

昂くんが嬉しそうにそう言った。

「…今頃、もし母や父がこれ聞いてたら、ひっくり返ってるかも」

「なんで？俺らが付き合ってることも、賛成してくれてるのに」

「反対はしないと思うけど、まさか、ラジオでプロポーズするなんてさ…」

「あ。そうか。えっと……。ちゃんと、ひかりさんをくだいって今度、言いにいきます」

「え？」

「挨拶、ちゃんとしないと、俺」

そついうのまで、ラジオで言っちゃう？

「わ。いきなり、俺、緊張してきた。突然ひかりのお父さん、反対だ！なんて言って、怒ったりしないよね？」

「た、多分ね……」

「……俺の親も聞いてたら、目飛び出してるかも……」

「そうでしょ？びっくりしてるでしょ？」

「うん。でも、反対はしないよ。一緒に住んでも、何も言わなかったし……」

「そうだね……」

「式は？」

「え？」

「結婚式」

「いいです。しなくても……」

「え〜〜〜っ！ウエディングドレス姿、見たい！」

え〜〜〜？もう、ラジオで何を言ってるの！っていうか、

「昂くん、もう時間」

「あ！ほんとだ。えっと、最後に、曲をかけます。あ、ディレクターさんが選んでくれたみたい。何？嵐の『ワンラブ』？お聞きください……」

♪100年先も愛を誓うよ 君は僕のすべてさ
信じている ただ信じてる 同じときを刻む人へ

どんな君もどんな僕でも一つ一つが愛しい
君がいれば何もいらない、きっと幸せにするから♪

うわ……。なんて歌詞？思い切りプロポーズの歌詞？

曲が終わると、昂くんが、

「わ、これ、すごい歌詞ですね。ディレクターさん、こんなの選んじやったの？聞いててまじで、恥ずかしいんだけど。ね？」

「うん……」

「でも、はい。そんな気持ちです。俺も……。100年先どころじゃないだろうな。何万光年も先まで、きつと一緒にいるよっていうか、その頃にはもう、ひとつの魂かな？ね？」

「う…、うん」

ああ。駄目だ。照れくさくて、何も言えない。

「じゃ、今日もミッドナイトデート聞いてくれてありがとうございます。たくさんの祝福のメールもありありがとうございます。また、来週まで、幸せな一週間をお過ごしください。あ…。俺は、めっちゃ幸せです！おやすみなさい！！！」

放送が終わり、脱力していると、ディレクターさんが入ってきて、

「おめでとう〜〜！」

と、拍手をしてくれた。他のスタッフも、手をたたいて喜んでくれた。

「だけど昂、これからが大変だ。明日はワイドショーで持ちきりだろうし、しばらくレポーターに追いかけられるぞ」

「その前に、会見しちゃいます。俺…」

「ま、頑張れよな。応援してるから」

ディレクターさんはそう言うと、光で包んでくれた。

「ありがとうございます！」

昂くんはにつこりと微笑んだ。

それから他のスタッフにも、おめでとうと言われながら、私たちは

ラジオ局を出た。

帰りのタクシーに乗り込むと、いきなり運転手が、

「ラジオ聞いてたよ。おめでとう」

と言ってきた。

「え？」

驚いて、聞き返すと、

「天宮昂くんでしょ？一緒にいる人が、彼女？」

と運転手がバックミラーを見ながら、微笑んで聞いてくる。

「あ、そうです」

「いきなりラジオでプロポーズ、すごかったね〜」

「はい…」

昂くんも私も、真っ赤になってしまった。

マンションに着き、コンビニに昂くんが寄り、私は先に部屋に上がった。

昂くんが、玄関に入ってくると足早にリビングに来ながら、

「わ〜。コンビニの店員まで、ラジオ聞いてたみたい。なんで？」

店で働いてないのか？」

と真っ赤になって言った。

「え？」

「これからは、一緒にどろどろと、買い物に来てくださいます。」
そ、そうなんだ。うーん、恥ずかしいな。しばらくは…。

「ひかり…」

昴くんは、後ろから抱きしめてきた。

「ん？」

「ごめん。いきなり、ラジオで…」

「ほんと、驚いたよ」

「うん…。ごめん」

昴くんは、心底悪かったって思ってるみたいだった。

「なんで？」

「え？」

「なんでいきなりプロポーズ？」

「だってひかり、ああしないと、受けてくれないような気がして」

「結婚を？」

「そう」

「……」

「そうかも……。どうしても、昂くんに気兼ねして、結婚はいいよって言うてそうだ。」

「でしょ？心の中でもそんなこと、思ってたよね？」

「気づいてた？」

「うん」

「昂くんは私を昂くんの方に向かせると、優しくキスをして、」

「愛してるよ」

「とささやいた。」

「私も……」

「私は、昂くんを抱きついてそう言った。」

10 記者会見

翌日、朝のワイドショーは、昴くんのいきなりのプロポーズで持ちきりになった。

それより何より、朝7時になるかならないかの時間に電話が鳴り、事務所から昴くんは呼び出された。

「え？今日もロケですけど…。え？その前に行かないと駄目ですか？」

眠気眼の昴くんはそう言うと、半分まだぼろぼろってしたまま、電話を切り、顔を洗いに行った。

「だ、大丈夫なの？怒られるんじゃないの？」

「え？なんで？」

「だ、だって、一緒に暮らしてたことも内緒にしてた」

「大丈夫だよ、だってさ、俺の人生だよ？なんで、そこで人から怒られなきゃならないの。そりゃ、秘密にしてたことは謝りに行くけど。結婚を決めるのも、プロポーズするのも、俺が決めることで、事務所の人は関係ないじゃん」

そ、そっかな〜。

「心配しないで、ひかり。安心してて。ほら、黒い霧出たよ」

昴くんはそう言うと、パツと光を出して霧を消した。

「あ、ありがとう」

そうだね。いきなりこんなことになって、動揺した。でも、何も心配することなんて、一つもないんだよね。

「そういうこと！すべて流れに任せて！ね？」

「うん」

昴くんは軽く私にキスをして、それから着替えると、

「じゃ、ちよつくら事務所に顔出してくる」

と、家を出て行った。

『あれ？ご飯！』

『うん、いいよ。どつかでなんか適当に食べる』

昴くんの声がした。

ああ…。もしや、これからすごく大変なことが起きるんじゃないのかな？あ…。また、黒い霧が出ちゃった。もっと、宇宙を信賴して生きなきゃね。

2時間して、昴くんから話しかけてきた。

『ひかり、聞こえる？』

『うん』

『いきなりだけど、明日、記者会見するよ』

『え?!』

『早めの方がいいって、事務所の人も言ってるから』

『早すぎる』

『ひかりも一緒に出ることになりそう』

『うそ。なんで?』

『そういう要望多いんだって。どうする?』

『私が決めていいの?』

『うーん。俺はもう、こうなったら、二人で出てもいいかなって
思ってるけど』

『え?』

『低い次元の時みたいにな、光を二人で出してさ、記者会見の会場ごと
と光で包んじゃおうよ。それに、テレビを通して観ている人まで、
光は届くよ』

『これもミッション?』

『きつと、そっだよ』

『わかった』

き、緊張！！！！

『低い次元で、経験してるじゃない』

『それとは違う。結婚の会見だし、ここでは昴くんは、売れっ子の俳優だし』

『それにひかりは、売れっ子の作家だし』

それは自覚ないよ。まったく…。

昴くんは、すごくあったかいエネルギーを送ってくれて、交信をきった。

どうやら事務所で、怒られたりすることもなかったようだ。

そっだよね…、もうそういう次元じゃない世界になってきてるんだもんね。

ノエルさんから電話が来た。

「ラジオ聞きましたよ。結婚おめでとうね」

「あ、ありがとうございます。それで明日会見を開くことにもなってます」

「まあ、楽しみね」

楽しみ…？そっか。そんなとらえ方なんだな。

徹郎と、緒方さん、それに珠代ちゃんからもメールがあつた。どれも、

「おめでとう。お幸せに」

というメールだった。ああ。本当にみんなして祝福してくれるんだな。

ワイドショーを見ている、コメンテーターが、

「ラジオでプロポーズなんてやるわね。でも、昴くんはずっと彼女とのことのろけてばかりだったし、本気で思ってるのね」

「みんなに祝福して欲しいって言ってたけど、祝福しちゃうわよね。なんだか、いつも幸せをおすそ分けしてもらってる気分になる」

そう言う、司会の女性もうなづいて、

「そうですね。自分もあのくらいのろける恋したいって思いますよ。羨ましいけど、お二人には幸せでいて欲しいって思います」

と言っていた。

「会見が明日開かれるってことですが、楽しみですね。どうやら、彼女、空野いのりさんも同席するようですよ。」

男性の司会者がそう言つと、

「まあ、楽しみね。またのろけまくってくれるんじゃないの？」

コメンテーターが笑つて、そう言った。

はあ……。もう私も同席することになつちやつてるのね。だけど、みんなあつたかく思つてくれてて、嬉しかった。

その後、昴くんから、明日の会見が、何時になるかメールが来た。

『なんでメール？』

『だつて、事務所の人が、ちゃんと今すぐ送つておけて。一緒に住んでるし、あとで言いますって言つたら、今日も遅くまで撮影だし、早めにメールしてあげなさいってさ……。すぐ後ろで見てるんだ。送らないわけにはいかないじゃん。心で話しておきます……。なんて言えないし。あ、もうそれもばらしちゃう？』

『ばらさないよ、それは……。そんなこと言つたら大変じゃない』

『だよね。あ、メールしたとおりだから。それと、今夜も夜中になる。寝ててもいいよ。早めに寝ないと、お肌に出ちゃうでしょ？』

『年だつて言いたいなの？』

『違うよ。でもさ、ひかりが肌のこと、気にしてるじゃんか』

『……。先に寝てるよ』

『うん』

でも寝れるかな。緊張で寝れないかも…。

『ぶ…。もう、緊張？』

そりゃそうだよ。緊張してるよ…。

『じゃ、寝れたら寝てて。寝れなかったら、待っててね。俺が隣にいたら、すぐ寝れるでしょ？』

『うん』

『あ、ひかり、今、めっちゃ喜んでた…』

『え？ほんと？』

『なんだ、また無意識？昂くんが隣にいたら、安心してすぐ寝れるって喜んでたよ』

そ…。そうかも…。

夜、やっぱりベッドに潜りこんでも、なかなか寝れなかった。昂くんは、静かに家に入ってきた。どうやら、私が寝てるかと思いながら、入ってきたようだ。

『昂くん？』

『あ、起きてた？』

『やっぱり、寝れなかったの』

ガチャ…。部屋のドアが開くと昴くんが、

「ただいま……。うにゃ……。っ！」

と言って、ベッドに飛び乗ってきた。

「うわ！昴くん、何……。？」

「へへへ。撮影ハードで、ハイテンションのままです」

「お疲れ様」

へロへロで倒れこむときと、ハイのままのときとあるよね…。

「風呂入ってくる」

「うん」

昴くんはベッドからスタツと飛び降りると、早足でバスルームに向かっていた。

…すぐそばにいる、昴くんのエネルギーを感じた。あつかたくって、愛しい…。それだけで幸せになる。

『ん？何？呼んだ？』

『ううん。呼んでないよ。ただ、昴くんのエネルギーを感じたかっただけ。あつたかい…。』

『風呂入っているから?』

『ふふふ。違うよ。昴くんがあつたかいの』

『ひかりも、あつたかいよ。すげえひかりの気が気持ちがいいんだ。あ、それもそうだね、俺ら同じ魂なんだから』

『そうだね...』

『ひかり...』

『.....』

『あ、うそ。寝ちゃった?』

ホワホワ、いい気持ちだ。昴くんエネルギーに包まれて、すごく幸せ。

その時には、もう私は寝ていたようだった。昴くんが、いつの間にか横にいて、私の肩を抱いた。そこは、雲の上だった。

「すげえ、俺ら雲の上にいるんだ!」

昴くんが喜んだ。

「気持ちいいね」

「うん。最高。どうしたの?なんで、ここにいるの?」

「なんでかな？わかんないけど、フワフワ気持ちがいいまま寝てたら、雲の上にいたの」

「おもしろ〜〜！」

昴くんは大喜び。

「どっかに雷様とかいないかな」

「ええ？」

「それとか、天使とか」

「ふふ…。いるって思ってたら、いるかもよ。夢なんだし」

「そうだね。でも、ひかりとこうやって、雲の上で寝転がってるのが一番いいや」

そう言うと昴くんはぐろんと寝転がった。

「あ〜。雲の上にいても、空が青い。太陽、まぶしい〜〜！」

「ふふ…」

昴くんの腕枕で、雲のベッドに寝てるみたいだ。

「ベッド？そうだね。じゃ、ここでHもしちゃっつ〜」

「Hって言うなってば…」

「え〜。いいじゃん、別に」

「このまんま、フワフワ浮いていたいよ」

「そ？じゃ、そうしよう」

昂くんはそう言つと足を組み、空を見上げながら、鼻歌を歌い出した。

ふ…。目が覚めた。外はもう明るかった。

昂くんは気持ちよさそうに、まだ寝ていた。そつとベッドから抜け出し、顔を洗いに行った。

会见だ…。鏡を見ながら、ため息をついた。

朝食を作っていると、昂くんが起きてきた。

「おはよー！」

けっこう元気で、目覚めがいい。

「あふ…。今日だね、会见」

昂くんはまったく、緊張していないみたい。

「ひかりは？緊張してる？」

「うん」

「大丈夫だって！」

そう言うと、昴くんはにかって笑った。

会話は午後から。それまで、撮影があるらしい。

「ハードなスケジュールだね」

「うん。一緒に住んでなかったら、夢でしか会えないよね」

「うん」

「昨日の夢、面白かったな。雲の上、初めてだよ。今度は海の中はどう？」

「息苦しそう」

「あはは……。夢だから、水の中でも、息が出来るってことにしちゃおうよ」

「うん、いいかも」

そんな話をしながら朝食を済ませ、それから着替えると昴くんは、ハグしてキスして出て行った。

『あとでね！』

昴くんから、声がした。

『うん』

どきどきだ…。でもきつとすべてが、うまくいく。大丈夫。そう自分に言い聞かせ、洗濯をしたり掃除をした。

そして、会見の時間の1時間前、家を出た。

昴くんの所属している、事務所にまず向かった。そこで、昴くんと落ち合って会場に行く。

『ひかり、もうすぐ着くけど、ひかりは？』

『私ももうすぐ、着くよ』

昴くんと心で会話をした。昴くんはずっとあったかいエネルギーを、私に送ってくれていた。

それから昴くんと会つと、マネージャーさんや、事務所の人と一緒に、会見の会場に向かった。

『はじまるね』

昴くんが心で話しかけてきた。

『うん…。ドキドキだ』

『くす…。ほんと、心臓飛び出しそうなくらいだね』

『わかる？。』

『わかるよ。なんか、俺までドキドキしてきちゃった』

『ごめん、伝染した?』

『あはは。どうかな?でも、ドキドキも楽しんじゃおうか?』

昂くんらしいな…。

「さあ、もう記者の皆様は、席についています。そろそろ時間です。準備はいいですか?」

事務所の人が言ってきた。

「はい」

昂くんはにこつてほほえんで、答えた。

いよいよだ。

会場に入ると、いきなりフラッシュの嵐だった。記者の人たちは、みんなにこやかだった。それに何人かからは、光も出ていた。

ほ…。その光で一気に気持ちが悪くなった。カメラをかまえながらも、光を出している榊さんの姿もあった。

そして、会見が始まった。昂くんは、静かにそしてにこやかに、記者の質問に答えていた。

「一緒にもう、住んでいるということですが、いつからですか?」

「今年に入って…、えっと、1月の中旬からだったかな」

「どうして、一緒に住むことになったんですか？」

「俺、あ、いえ、僕が忙しくなると、ほとんど会えないものですから、じゃ、一緒に暮らしちゃえば、もっと一緒にいられるよねって、そんな感じです」

昴くんは、ひょうひょうと答えながらも、光を出していた。私も、横で光を出しながら聞いていた。

「出会ったのは、いつですか？」

「今年の夏ごろです」

「どこですか？」

「舞台を観に来てくれました」

「そこで、会って一目ぼれですか？」

「いえ…。そういうわけじゃなかったですけど…。でも、気になっていました」

「空野さん、空野さんは、天宮昴さんのことをどう思っていましたか？」

うわ。私にだ…。落ち着け～～！

『落ち着け～～』

昴くんもそう心で言って、くすって横で笑った。

「はい。昴くんのファンでした」

声が震えた。

「いつごろからですか？」

「今年の、春から」

「お付き合いをしようと言い出したのは、天宮昴さんからですか？」

「え？いいえ。はじめは、なんていうか…、友達だったっていうか…。付き合っつていう気はなかったんですが、いつの間にか大事な存在になってて…」

昴くんはそう答えた。

「それで交際が始まって、一緒に住むようになったんですね。では、結婚をしようと思ったきっかけは？」

「ラジオでも言ったように、こそこそしているのも嫌でしたし、みなさんに祝福されて、どうどうと二人で暮らしていきたくったんです」

「天宮さんはまだ、20歳ですよね」

「はい」

「まだ、結婚するのは早いとは思いませんか？」

「はい、全然」

「空野さんは10歳年上ですが、年齢のギャップを感じたことはないんですか？」

「ないです」

昴くんがきつぱりとそう言うと、私にも聞いてきたので、

「ないです…」

と静かに答えた。

「空野さんのどこに惹かれたんですか？」

「全部です」

また、昴くんはきつぱりと答えた。

「空野さんは、天宮さんのどこに惹かれたんですか？」

「わかりませんが、気づいたら、もうファンでしたから」

「ファンでいた時は、テレビやスクリーンで観ていたんですよね？
実際会って、印象が違ったりしませんでしたか？」

「はい。違いました」

「どこがですか？」

「はい…。あの、もっと大人なイメージがあつて、落ち着いてる礼儀正しい青年だつて思つてたんです」

『え？もろ、そうじゃん！』

横で昴くんは私を見て、そう言つてきた。

「でも…、実際に会つて話してみたら、子供っぽいところもあつて、それに楽天家で、いつでも明るくて、なんでも楽しんじゃう、そんな人でした」

「子どもっぽい？」

「はい。けっこう…」

『なんだよ～～！ばらすなよ』

「では、年齢のギャップを感じたんですか？」

「いえ、それはまったく」

「ひかりも、子どもっぽいんですよ。精神年齢は変わらないです」

昴くんが勝手に答えていた。

『なによ～～！』

『反撃！』

え？何それ……。…。

「さきほどから見ていると、何度も何度もお互い視線を合わせてますけど、アイコンタクトですか？」

「はい。目を見たら、何を思ってるか、たいていわかつちやいます！」

昴くんはそう、どつどつと答えた。

「心が通じ合ってるんですか？」

一人の記者が光を出しながら聞いてきた。あ、仲間の人だ。

「はい！もうばっちり！」

昴くんはにかって笑いながら、答えた。

「では、今、空野さんは何を思ってますか？」

『え？』

何？いきなりなんて質問？

昴くんは私の方をじっと見た。

『何？何を言うつもり？』

「えっと…。あはは。多分、今、めちゃ困ってます。ね？」

「はい…」

「空野さんのことを、本当によくわかっているんですね」

他の記者が言ってきた。

「はい。今日の会見も、ずっと緊張してたのわかってたし…。ひかりは、けっこうしっかりもののように、おっちょこちよいです。シヤイだし…。あ。そうなんです。恥ずかしがりやなんです。すごく」

『言うな…。ばらすな…。！』

「あはは。今、ばらすなって思ってるでしょ？そういうところが可愛くって」

「だんだんとのろけになってきましたね」

「あ、すみません。つい…」

「結婚式はいつごろ？」

「まだ、全然決めてないです。」

「お子さんは欲しいですか？」

「それもまったく考えてないです」

「空野さんのご両親は結婚のことをなんて？」

「はい。賛成してくれてます。すごく喜んでて…」

「では、天宮さんのご両親は？」

「うちの両親も喜んでました。正月、ひかりと実家に行ったんですけど、すごくひかりのこと気にいつてたし」

「ひかりさんは、あ、空野さんは…」

「ひかりでいいです」

「すみません。では、ひかりさんは、以前離婚をしたとご自分で言っていましたよね。もとだんなさんに未練などはないんですか？」

「はい。あ、結婚のことをラジオかテレビで知って、おめでとうのメールをくれました」

「じゃ、もとだんなさんも、祝福されてるんですね？」

「はい」

私はにっこりと微笑んで、うなづいた。

会見の会場は光に包まれていた。私と昴くんから出る光と、記者やカメラマンの中にいる、仲間から出る光で。

会場全体はあたたかく、みんながにこやかだった。記者会見が終わっても、まだ、みんなにこやかで、

「おめでとう」

とか、

「お幸せに」

という声が、記者からも聞こえた。

「ありがとうございます」

昴くんとぺこっとお辞儀をすると、会場を私たちはあとにした。

「は〜」

控え室で、思い切りため息をつき、置いてあったお茶を一気に飲んだ。

「咽からからだった…」

そう言つと、昴くんも、

「俺も」

と、お茶を飲んでいた。そこにマネージャーさんが来た。

「昴は次の仕事場へ移動ですから、送っていきます。あ、ひかりさんは、駅まで車で送りましょうか？」

「はい。お願いします」

マネージャーさんの車に乗って、そのビルの近くの駅まで送ってもらった。

「もう、ほっとできた？」

「うん。もう、大丈夫」

「じゃ、俺今日も遅くなるから、先に寝てていいよ。今日はすぐ寝れるんじゃない？」

「待ってるよ」

「そう？」

昴くんはそう言うのと、私の手をぎゅって握った。駅に着くと、

「じゃね、気をつけて」

と昴くんは言って、手を振り車は出て行った。

会見の様子はすぐに、テレビのワイドショーで流れ、またメールが次々に送られてきた。

それに、母からの電話。兄からの電話。もう、仕事中だよね？兄なんていったいどうやって、テレビ見てるの？と思ったら、携帯でしつかりと、見ていたらしい。

「あゝ。終わった」

電話やメールがひととおりやってきて、落ち着くと、私はさっさとお風呂に入り、のんびりとした。

これからは、何をしたらいいんだろう？そんなことを思いながら、テレビを見ると、まだ昴くんとのお見合いが映されてて、その画像からは始終光が飛び出ていた。

昴くんの顔、私を見ながらすごく優しい表情してたんだ。それにも気づけないくらい、緊張してたな。

私は昴くんを見る時、なんだか、すがってるかのような。昴くんにずっと助けてって心で言ってたかもしれない。だって、本当に緊張してたし…。

そんな私を、昴くんがずっと光で包んでる様子も、画面から見ることが出来た。光を見れる人なら、すぐにわかるな。これ…。

ノエルさんからも電話があり、すごい光でしたねって言われた。それに、結婚のお祝いをみんなで、しましうねとも…。とても、嬉しかった。

11 幸せの連鎖

部屋でぼくっとしてしていると、私の声が体から聞こえた。

『高い次元の、私、聞こえるかな？』

『聞こえてるよ！』

低い次元の私からの、声だった。

『私、昴さんと籍を入れたの』

『え？』

『結婚したの』

『え……？もう？』

『うん。それで、それを今日昴くんが会見で発表した』

『私も出たの？その会見』

『私は家で、テレビで観てた』

ああ……。それは違ってるんだ。

『こっちでは、まだ結婚はしてないけど、結婚するって会見は開いたよ。今日』

『え？本当？そっちでも？』

『うん。でもね、私も会見に出たの』

『そうだったんだ…。籍はまだ？』

『まだ、これから』

『そうか…。やっぱり起きてくること少し違うけど、リンクしてるね』

『うん。そうだね。あ、もっと低い次元の私はどうかな、ちょっと聞いてみる』

『うん。じゃ、交信切るね』

『うん、またね』

私は、もっと低い次元の私を呼びかけた。すぐに返事が来た。

『元気？』

『うん。そっちの私は？』

『元気だよ。昂くんも元気？』

『うん。もう、仕事も決まって一緒に住んでるんだ』

『仕事？』

『うん。昂くん、記者会見に出てから、スカウトがあつて、ずっと
そっこのを断つてたんだけど、ファッションモデルの仕事を一回
してから、はまっちゃつて』

『ファッションモデル？』

『今は、モデルの仕事の後、舞台の仕事も来て…』

『舞台?!』

『ミュージカルの…。昂くん歌手になるのが夢だったから、喜んで
る』

『やっぱり、そういう方向に行くんだね』

『高い次元でも、昂くん俳優してるんだっけ？』

『うん』

『一緒に暮らすんだからって、その前に籍も入れたんだ』

『結婚?』

『うん。父も母も、許してくれて…』

『そうか…。なんだ、どの次元でも結婚するんだね』

『そつちも?』

『籍はただただ、結婚することになつたんだ』

『そうか……。ふふ。どの次元でも幸せいっぱいなんだね…、私』

『うん。ふふ…』

みんなで幸せだ……。そしてきつとどの次元でも、みんなに祝福されてて、昴くんとも熱々なんだろうな…。

幸せ気分を満喫しながら、ぼけっとながら昴くんの帰りを待っていた。昴くんは、マンションのエントランスに着くなり、

『ひかり！ただいま……！！！！！！』

と、ものすごいハイテンションで部屋まで、駆け上がってきた。

「おかえり！」

と玄関を開けると、

「ただいま……！！！」

と大きな声を出して、入ってきて抱きついた。

「し……。もう夜中だよ」

「あ、そっか。ごめん。今まで近所にはれないように、黙って帰って来てたから。もう隠さなくていいかと思ったらしい」

「もう……。時間は気にかけないと……」

昂くんは、私が部屋に行こうとすると、後ろから抱きしめてきた。

「歩けないよ」

「一緒に風呂はいろ！」

「もう入っちゃった」

「え〜〜〜〜!!!!!!」

昂くんはがっくりして、抱きしめてる腕を離れた。

「あつたまってるから、すぐ入れるよ」

「ちえ〜〜〜〜」

昂くんは、そのままりビングに行かず、バスルームへと直行して中に入ると、

『ひかり、着替え持ってきていて』

と心で言ってきた。

『うん』

下着とパジャマを持って行くと、もう鼻歌が聞こえてきてて、機嫌は直っていた。

『立ち直り、早…』

『さっさと出るから、いちゃっつこつねっ！』

『……』

『あ、喜んでる？』

『呆れてるの……』

『あはは！』

ほんと、楽しいな。昴くんといると…。

昴くんは本当にあつという間に出てきて、またいつものように、バスタオルを頭にかぶり、歯ブラシをつつこんで部屋に来了。そして、鼻歌まじりで歯を磨く。

「なんか、すごいご機嫌だね。そんなに撮影ハイテンションになったの？」

「違うよ！ひかりともう堂々と、暮らしていけるからそれで嬉しいんじゃない。あ、明日はさ、昼から撮影なんだ。だから、この辺でブランチでもない？」

「ブランチ？」

「遅い朝食。寝坊して、遅くに朝食食べようよ」

「いいよ。でもどこで？」

「ファミレスでいいや」

「うん」

昂くんは口をゆすいできて、それからドライヤーを持ってきて、

「乾かして！」

と甘えてくる。

「しょうがないな〜」

と言いつつも、昂くんの髪を乾かすの嬉しいんだよね。

「でしょ？」

でしょってね〜…。ま、いつか。

昂くんは急に静かになった。何を考えてるのか、エネルギーをあわせると、まったく何も考えていなかった。ただ、ぼ〜っとしてる。

『幸せ、かみしめてるの』

くす…。そうなんだ。

『あのね、今日低い次元の私から交信があって…』

『うん』

『結婚したんだって』

『え？あつちの次元でも？』

『うん。もっと低い次元の私たちも結婚したって。それから一緒に暮らしてるって』

『おお〜。そうなんだ。あ、俺って何してるって？』

『舞台。ミュージカルの出演するってよ』

「まじで？！」

「うん」

昴くんが大きな声を出して聞いてきたから、私も声を出して答えた。

「へ〜〜！そうなんだ。歌手になるの夢だったもんな〜。ミュージカルか！」

「やっぱり、そういう方向に行ったね」

「うん。あれ？じゃ、俺らだけまだ、結婚してないの？」

「うん」

「そっか〜。ひかり、いつ籍入れる？今度の大安吉日にする？」

「うん…。いいよ」

なんだか、照れくさいな。そういう話。

「え？そう？ひかり、天宮ひかりになるんだね」

「そうだね」

「えへへ」

「？」

「なんか、嬉しい」

昴くんは本当に嬉しそうだった。

髪が乾く前に、昴くんはもううつらうつらしていた。

「も、駄目だ…」

そのまま、ベッドにボタン…。そしてぐっぐっってもう、寝息を立てた。

「ほんと、昴くん、寝付きいいよね」

私も、昴くんの隣に潜り込み、ひつついて寝た。昴くんは、いつつも何かいい匂いがする。なんでかな？

夢の中では、海の中だった。

「あ、ひかり来た！どう？俺の夢。海の中だよ。でも息も出来るでしょ？」

「うん」

「海深くまで潜ってみない？ 遺跡とかあるかも」

「ふふ…」

「何？」

「楽しくなって思っ…」

昂くんと一緒に手をつないで泳いだ。綺麗な熱帯魚、海がめ。ああ、まるで二モの世界だ。…と思っていたら、さんご礁とカクレクマノミがいた。

「昂くん、二モ！二モ！」

「ほんとだ！」

昂くんとおおはしゃぎした。それから、マンタが悠々と泳いでいて、その横をエイが泳いでいった。

「イルカに会いたいな」

私が言うと、

「じゃ、もう少し浮上してみよう」

と昂くんが言っ、海上近くに行くと、横をすい〜ってイルカが泳いでいった。

「イルカ！…！」

私が大騒ぎすると、イルカが2頭きて、頭を私たちの方に向ける。

「背ひれ、つかんでみて、ひかり」

そう言われてつかむと、スイ〜。私を連れて、イルカが泳ぎ出した。

「すご〜い！」

昂くんも、もう1頭のイルカと泳ぎ出した。

感動だ…。

思い切りイルカと、じゃれついたあと、イルカと別れると、また二人で海の底まで潜ってみた。

「あつた！遺跡！」

本当にそこには、海に沈んだ町があつた。

「アトランティスカ、ムーか…」

昂くんはわくわくした顔つきで、そう言った。

「これ、昂くんの夢なんだよね？」

「うん」

「じゃ、昂くんの思い通りになってるんだ」

「かもね」

「ふうん…。じゃ、次は何があつたらいい？」

「そうだな。海賊船とかが沈んでる…」

「それは嫌だ！」

「なんだか、怖そう。」

「サメが出てくる…」

「やだやだやだ、絶対にやだ！」

「じゃ、人魚？」

「に、人魚？」

「綺麗な女性だつたらやだな…。」

「あはは！ひかり、嫉妬深いんだから、もう…」

「何よ…。いいじゃん！」

「はは…。それじゃあね。浜辺に行つて、のんびりするのは？」

「うん。いいよ。すごく綺麗な浜辺がいいな」

そして二人で浜辺に行くと、真っ白な砂浜で、すんごい綺麗な海が

広がっていた。

「ここね、一応無人島っていう設定ね」

「ええ？」

「二人っきりの世界だから」

「くす…。いいね、それ」

すぐ近くに、バナナの木がなぜかあり、それを取って食べると美味しかった。それから島を探検してみると、綺麗な花や珍しい鳥がいた。

そして一気に夜になり、満天の星空が現れた。

「え？もう夜？」

「うん。やっぱり、夜の方がその気になるでしょ？真昼間だと、ひかりが恥ずかしがるかなって思ってた…」

何の話よ……。もう……。

砂浜まで手をつないで歩き、星が本当に降ってきそうな星空の下、抱き合った。

なんだか、スケールの大きな夢だよね……。そんなことを思っていると、

「じゃ、次はどこに行きたい？」

昴くんが聞いてきた。

「そうだな。オーロラを見たりするのも、いいかも」

「じゃ、次はオーロラツアーね」

「次？次の夢でのお楽しみ？」

「そ。そういうこと」

ふふ…。昴くんとみる夢は、楽しいね…。

そして、目が覚めた。昴くんも同時に目が覚めたらしい。

「おはよ！ひかり」

「おはよう…」

窓からは朝の光が差し込んで、まぶしかった。

私が洗濯をして、掃除をしている間、昴くんはすごい集中力で台本を読んでいた。

それから昼近くになり、近くのアミレスに行った。店員が私たちに気がつき、

「会見見ました。おめでとございます」

と言ってくれた。

「ありがとうございます」

昴くんが丁寧にお辞儀をしてた。私もそれに習って、お辞儀をした。席に通されると、周りの人が私たちを見た。昴くんは軽く会釈をして、にこって微笑んでいた。

『え？』

それを見て、びっくりしていると、

『なんかね、嬉しくて誰にでも微笑みかけたくってるの、俺』

と昴くんが心で言ってきた。

『ふふ…。そうだね…。』

昴くんはすごい光を出していた。私からも光が出て、二人の光が混ざり合い、辺り一面を包んでいた。

「すごい光ですね」

隣の席の人が、そういきなり言ってきた。

「え？」

私と昴くんが驚いていると、その人はにっこりと微笑み光を出した。

「会見も見ました。すごい光をお二人が出しているなって思いなが

ら」

「見えるんですか？」

昴くんがその人に聞いた。

「はい。お二人は本当に素晴らしい。ブログや、小説からも光が出ていて、私は驚きました」

「あの…。もしかして、あなたももう目覚めてる？」

私が聞くと、その人はうなづいた。

「はい。瞑想の会に行つて…」

「白河さんの？」

「そうです。あなた方のことも、白河さんやノエルさんから、聞いてますよ」

「この近くに住んでるんですか？」

「はい。そうだ。この近くのお寺でも、座禅の会があるんです。良かったら今度、お二人も来ませんか？」

私が昴くんの方を見ると、昴くんはにこつて微笑み、

「はい。じゃ、時間が空いたら、行ってみます」

と答えた。そしてその人は、先にお店を出て行った。

「驚いたね。目覚めた人が、こんなそばにいて」

昴くんがそう、話しかけてきた。

「うん。会見の会場にもいたよね。光を出していたよ」

「うん、見えてた。榊さんもいたし」

「目覚めの連鎖だね」

「そうだね」

「町を歩いてても、黒い霧が少なくなっているよね」

「うん」

私たちは、のんびりと遅い朝食を終え、お店を出ると、昴くんはそのまま駅に行き、テレビ局のスタジオへと向かった。

私はまたマンションに戻り、昴くんのシャツにアイロンをかけたり、雑巾がけをしたりした。そんななんでもないことが、すごく幸せだった。

そして、翌週の大安吉日、私たちは入籍した。

その日の夜に実家に報告に行くと、父も母も大喜びをして、すぐにお寿司をとり、ビールで乾杯をしてお祝いをした。

昴くんはすぐに真っ赤になり、眠そうにしていた。

『駄目だ。寝そうだ。俺…』

「昴くん、マンションまで持たないかも。今日は泊まっていてもいい？」

私が聞くと、母は大喜びをした。

「いいわよ！じゃ、広輝の部屋に泊まってく？」

「母さん、一応もう夫婦なんだし…」

そう父に言われて母は、

「そうね。でもひかりの部屋のベッドじゃ小さすぎるでしょ？あ、お客さんよしの和室に布団敷きましようか？」

と言ってきた。

「うん、そうして」

母がすぐに布団を敷いてくれた。その間に昴くんは顔を洗ったり、歯を磨いていたが、和室に行くと、そのまま布団に倒れこんだ。

「寝るの待った！着替えて、昴くん」

「着替え、ないよ…」

「兄のを貸すから」

すごいタイミングで母が、兄のパジャマを持ってきた。

「はい」

母から受け取り、昴くんをどうにか起こして着替えさせた。着替え終わると、

「も、駄目…」

と布団に潜り込み、ぐぐぐぐぐ。またかい…。ほんと、寝つきのよさ、世界一なんじゃない？

私はまったく眠れそうになくて、リビングに行くと、父が一人でお酒をしみじみと飲んでいた。

「あれだなぐぐ。昴くんはお酒、弱いんだなぐぐ」

一緒に飲み交わしたかったようで、がっかりしているようだった。

「ひかりは、お茶でも飲む？」

「うん。そうする」

母がお茶を私と母の分、持ってきてリビングに座った。

「昴くんは、ほんと、いつ見ても綺麗ね」

母も昴くんの顔を見て、うっとりしていたようだ。

「そうだよ。肌も私よりもつるつるだし」

「若いんだから、そりゃそうだろう」

父に言われてしまった。

「それに、ほんといい子よね」

母は、とにかくお気に入りの様子。

「息子になったんだよね」

「え？あら、そうよね！なんか、照れくさいわよね。これから、お義母さんなんて呼ばれるのかしら」

母はちょっと、顔を赤く染めた。おいおい……。照れてどうするの……。ああ、親子だなんて思ってしまった。

12 新婚生活

昴くんは、事務所からのプレゼントで、年末年始に9日間もオフがもらえた。

「新婚旅行、行って来ようよ！」

「うん。あ、でも実家にも行ったほうがいいんじゃないの？」

「そうだね。じゃ、1泊してから、そのあと行くよ。どこに行きたい？俺、海外行ってみたい」

「うん、行きたい！でも英語話せないよ」

「それは俺も同じ…。じゃ、日本語通じるハワイ？あ。でも年末年始って、芸能人多そう。あ、そっか。どっかの島にする？オアフ島じゃなくって」

「うん！」

早速私は、旅行会社に当たってみると、一週間のツアーを取ることが出来た。

その旅行に行く前に、式を挙げたらどうだってうちの両親から提案された。

「今からどこか、あいてるのかな」

ウェディングプランナーに頼んでみると、すぐにレストランでの披

露宴をプランニングしてくれた。

式はクリスマスの日に決まった。

「聖なる日に式って、なんか、すごいね」

昂くんはちょっと、感動しているようだった。

昂くんがドラマの撮影で忙しい中、私は母とウェディングドレスを選んだり、招待状を送ったり、着々と結婚式と披露宴の準備をした。

そして、あつという間に12月25日は来た。

昂くんは真っ白のタキシード…。ああ！めっちゃかっこいい。

でも、昂くんは私のウェディングドレスを見て、感動してて、自分のかっこよさになってまったく気づいていないようだ。

『あつたりまえじゃん！ひかりの方が何倍も綺麗で…。俺、すんげえ感動してる！』

ほんと、昂くんは目をうるませていた。

式が終わると、披露宴パーティ。いきなりのパーティにもかかわらず、たくさんの人が来てくれた。

ノエルさん、白河さん、海藤玄さんや、そのお子さんたち。葉月ちゃんや悟くん、珠代ちゃん、陽平くん。それに流音さん、漆原さん。薫も美里も来てくれた。みんなで、祝福してくれた。

報道陣もけっこう来て、写真を撮ったりしていたが、テレビカメラは丁重にお断りした。

会場はものすごい光に、包まれていた。何しろみんなで光を出すものだから…。パーティの時のその光はきっと、地球全体を覆うくらい光だったんじゃないだろうか…。

『ひかり、みんなで祝福してくれて、俺ら幸せ者だね』

『うん、本当に』

『この幸せが、みんなにどんどん伝わって、みんなも幸せになったらしいね』

『うん』

『そのためにも、これからもずっと、いちゃついていこうね!』

『え?』

『ね?』

くす…。

『うん』

昂くんはにつこりと微笑み、私の手を握った。

あったかいエネルギーが注がれた。

『昂くん、大好きだよ』

昂くんにそう心で言うと、

『おれも、めっちゃ愛してるよ』

と昂くんが光を思い切り出しながら、そう返事した。

翌日、式に昂くんのご家族も来ていたので、実家に泊まるのはやめにして、1日家でゆっくりとしながら、旅行の準備をした。

近くのスーパーに二人して、旅行のための下着やら、冬だというのに、日焼け止めなどを買いに行くとお店の人に、

「あ。もしかして、どこかあったかいところに、旅行ですか？」

と、聞かれた。まだ若い女性の店員さんだった。昂くんは、

「するどいな。ひかりと新婚旅行でハワイ行くんです」

と、ばらしていた。

「素敵。いいな〜。私も行きたいな…」

その女性は、目がハートになりながら、昂くんを見ていた。

「ああ。行けるといいですね、いつかハワイ」

昴くんはにこりと微笑みながら、そう言ったが、いやいや、その女性が多分、昴くんとハワイに行くのを羨ましがってたんだと思う。

昴くんは撮影が忙しくて、なかなか一緒に近くに買い物に行くことも出来ず、ドラマが終わり、ようやくこうやって、二人揃って買い物にも行けるようになった。

「手つなごー!」

「え?」

『そんなに恥ずかしがらないでいいじゃん、俺ら、夫婦だよ?』

『そ、そうだけど...』

やっぱりなんか、妙に照れくさい。でも、そんなのおかまいなしに、昴くんは手をつないできた。

それから、レンタルビデオ屋に行き、DVDを借りそしてマンションに戻った。

そして、旅行の支度を終え、のんびりと夕飯を食べてDVDを見終えると、

「明日早いし、もうお風呂入って寝ない?」

と昴くんが言ってきた。おや、めずらしい…。

昨日は式と披露宴で私が疲れてしまい、お風呂に入るとさっさと寝てしまった。夢の中でもまだ、式の続きをしてる感じの夢で、昴く

んは夢の中で、

「また、俺と結婚式するの?」

と驚いて、笑っていた。

いいじゃん。だって、昂くんめっちゃカッコいいから、何度でも見た
いんだもん。

でもその式では、昂くんは紋付袴。そう、それも見たかったんだよ
ね…。私は綿帽子をかぶって白無垢だった。

「白無垢のひかりも、すげえ綺麗……」

結局昂くんも夢の中で、大喜びをしてて、夢でも私たちは結婚式を
挙げていた。

そして、今日も、またすぐに寝ちゃうんだ…。

「不服? いいよ。疲れてないなら、Hしても」

「Hって言わないでっば!」

「ひかり、疲れてないの? 明日からハワイだし…」

「うん、疲れてるかも。やっぱり早くに寝る」

「うん。だから、お風呂は一緒に入ろうね!」

「……」

そう言われると断れないじゃない…。そして一緒に入って、べったりバスタブでくっついていると、

「あ。駄目だ。俺、その気になりました」

と昴くんは、その気になってしまった。やっぱり…、こういう展開…。

『あ。そうなるって思ってた？』

『思ってた…』

『なんだ…。あはは…』

そして昴くんは優しく、キスをしてくる。ああ。また、私、溶けちゃうな…。

翌日、ハワイに出発。

タクシーを呼び、そのまま成田へ。うーん、さすが芸能人？私だったらリムジンバスか電車に乗るな…。

そして、飛行場に到着。

サングラスに、帽子までかぶっているが、

「天宮昴だ！」

と周りの人に、昴くんはばれていた。そっちを見ると、軽く昴くんは会釈をする。

ありがたかったのは、取材陣がいなかったこと…。

カウンターに行き、手続きを済ませると、ゆっくりとカフェでコーヒーを飲んだ。

「あ〜。もうすぐハワイだ〜」

昴くんがコーヒーを飲んで、にやけてそう言った。

「昴くん、ハワイは初めて？」

「うん。アメリカなら、去年の夏に行っただけ」

ああ、そうだったよね。

「ひかりは？」

「OLの時、友達で行ったよ」

「いいな〜」

「いいな〜って、これから行くじゃない」

「あ。そっか…」

周りにいる人がちらちらとこっちを見ながら、話しているのが聞こえた。

「天宮昴と空野いのりじゃない？」

ああ。私のことも知っちゃってるのよね…。

『いいじゃん。別に。言わせておけば』

昴くんは悠々とコーヒを飲んでいたが、私はまだ慣れてなくて、どう反応したらいいのか困ってしまう。

「あの…」

二人の20代前半くらいの人が、声をかけてきた。

「はい？」

昴くんが返事をした。

「ご結婚おめでとうございます」

いきなりそう言われて、私はめんくらったが、昴くんはにっこりと微笑んで、

「ありがとうございます」

と丁寧に、答えていた。私も慌てて、横で小声でお礼を言った。

「きゃ〜〜！」

二人は、私たちのいた席から離れると、声にならない声で喜んでい

た。昴くんのファンかな…。

「昴くんに出っっちゃった。綺麗だよ！ありがとっってお礼言ってくれたね！」

しばらく二人できゃっきゃってしているのが、聞こえていた。

『すごい。喜んでるね…』

私が心で昴くんにそう言つと、

『うん。嬉しいね』

と昴くんはにつこりと笑いながら、心で返事した。こういつの、素直に喜んじゃう昴くんも、すごいと思うよ。いつもながら…。

『？そう？』

うん。天狗にもならないし、えらぶることもない。

『あはは。だって、俺、別にえらいわけじゃないし』

あゝあ。天真爛漫な笑顔…。たまらないよね…。

『ひかり…』

『え？何？』

『………』

『あ、照れてる？』

『あんまり、はずいこと言うから...』

『だって、本当のことだもの』

昴くんは席を立ち、真っ赤になりながら、私の手をつかんで、

「もう時間だ。行くよ」

と、歩き出した。

それから飛行機に乗り込んだ。ビジネスクラス…とは行かず、エコノミー。でも、ハワイまでの距離ならそんなに窮屈でもないよね。

『あ、なんだ。窓側じゃないんだ』

昴くんがちょっと残念そうだった。

真ん中、通路側に私が座り、その奥に昴くんが座る。しばらくして、

「すみません」

と、女性二人が私と昴くんのシートの前の狭い隙間を通り、昴くんの隣に空いていた二つのシートに座った。

「ああ。もうすぐハワイだね！ハワイ暑いかな」

少し息を切らして、その二人は話し出す。見た感じ20代。

「年末年始だし、芸能人とかいたりして！」

いやいや、もう隣にもすでにいるんだけど、顔を見ていないからか、気づいていない様子。

しばらく二人は話に盛り上がっていた。昴くんは、そんなのおかまになしに、イヤホンをつけ、音楽を聞いているようだった。

『ひかり…』

『何？』

『ひかりって、飛行機大丈夫な方？』

『うん。けっこう平気。なんで？』

『離陸するときだけ、手握っててね』

『え？もしかして、怖いの？！』

『ちよ、ちよっとただだよ』

ぶぶぶぶ。思わずふきだすと、昴くんは、

『なんだよ！笑うなよ！』

と心で怒ってきた。あ、何も話していないのに、ふきだしてるのは変だよ…。

「ごめん、つい」

小さな声でそう返事をした。

「いいよ…。ふんだ」

あ、すねた。

『今から手、つないでてあげようか？』

『もういいよ～～～だ』

あ、完全にすねた。

それから、アナウンスが入り、C Aが機内を回りだした。

「シートベルトをお閉めください」

と言いながら。そして、昴くんと私のところにも来て、シートベルトが閉めてあるか確認していて、昴くに気がついたようだ。

「あ！」

C Aが一気に真っ赤になった。

昴くんは目が合ったので、ぺこって軽く会釈をしていた。C Aはその後私を見ると、ああって何か納得するような表情を見せた。

『昴くんだって、わかったみたいだね。でも昴くんの横の女の子たちは、気づいていないみたいだけど』

『え？』

『うっん、なんでもない』

飛行機が動き出した。

『あ、動いた！』

昂くんはすねてたくせに、私の手を握ってきた。

『この前のアメリカでは、どうしてたのよ？』

『事務所の先輩の手、握ってた』

『え？男の人だよね？』

『うん』

『あはははは。怪しい』

『じゃ、女性スタッフと手つないでた方が良かった？』

『い、嫌かも…』

『でしょ？ああ！わあ！』

『え？』

『飛んだ?!』

『うん』

体がフワって浮いた。

『幽体離脱もしてるし、宇宙船にまで行くくせに、こっいつの苦手なの？』

『魂が浮くだけなら、平気なの！』

くす…。変なの。

『どうせね！』

あ、またすねた。飛行機が無事飛び立ったせいか、昴くんは手を離した。

しばらくして、シートベルトを外していいというサインが出ると、昴くんはさっさと外し、

「俺、トイレ」

と席を立って、トイレに向かっていった。…緊張のあまり、気持ちが悪くなった……。とか？

『ちげえよ。緊張のあまり、トイレが近くなっただけでえ！』

ぶふ…。あ、やばい。また一人で笑ったら、変に思われるよね。

ぽつんと昴くんの席が空いたので、その隣にいる女の子たちが見えた。ハワイのガイドブックを一人が見て、もう一人は何かの雑誌を

読んでいる。

「ここに行きたいんだよ〜」

一人は、ハワイのどこかの店に行きたいらしい。

「あ〜〜。なんってかつこいいのかな」

もう一人は、雑誌を見ながらそこに写っている誰かに、見とれている様子だ。誰だかまでは、ここからは見えない。

「もう〜。ハワイに行くんだから、ハワイのこと考えようよ」

と友達に言われている。

「ゆみとハワイもいいけど、彼氏と行きたかった!」

「それはこっちも同じだよ。でも、彼氏できなかったんだからしょうがないじゃん」

ふふ…。まだ、10代かもしれないな。化粧が濃くてわからないけど。

「あ〜あ。今年こそって思ってたのに、またクリスマスも女友達と飲んで歌って終わったし」

「あやは〜、昂ばつかおいかけてっから、彼氏もできないんですよ?」

す、昂?

「ゆみだつて、せつかく彼いたのに、3ヶ月で別れたじゃん」

「向こうが浮気したんだもん。もう、それ言わないで。また頭に血がのぼるから」

昂？まだ私は、その言葉にひっかかっていた。昂くんの隣の席の子だ。見ている雑誌のページをどうにか見ようとしても、覗き込む形になるから、見れなかった。

そこに昂くんが、戻ってきた。

『ひかり、ごめん…、前通るよ』

昂くんはなぜか、心で話をするから、声もあまり出してないし、隣の子も気づいていないんだろうな。

もし、昂くんのファンだったら、すごいびっくりすると思うんだけど…。

『もう、緊張取れた？』

と心で聞いてみた。

『うん。あとは、着陸のときね。また、手つないでね』

『うん。わかった』

ほんと、可愛いよね…。

CAがお絞りと飲み物を運び出した。

「お飲み物は、何がよろしいですか？」

「コーヒーください」

私はコーヒーをもらった。昴くんは、

「オレンジジュースありますか？」

と聞いていた。

「はい。ございます」

さっきのCAの人だ。また、顔を赤らめていた。

CAからジュースを受け取ると、

「ありがとう」

と昴くんは、にっこりと微笑んだ。CAはますます、顔を真っ赤にした。そりゃ、そうだ。その笑顔はすごい。誰でも、惚れちゃうよ。あ、昔あったよね、そんなギャグ。

『惚れてまっやる〜』

『あはは！ひかり、やめて。ジュースふきだしそうになった』

隣で、笑うのをこらえながら、昴くんが心で言ってきた。

CAはさらに昴くんの隣の女の子にも、

「お飲み物は何がよろしいですか？」

と聞いていた。

「あ、えっと…」

昴くんのコップに入ってるジュースを見ながら、

「オレンジジュース」

と言うとその横の子も、

「私も」

と答えていた。CAがコップを持って、その子に渡そうと手を伸ばすと、昴くんがさっと手を出して受け取り、

「はい」

とまず、奥の子に手渡した。

「あ、すみません」

奥の子が恐縮しながら、受け取る。もう一個CAがコップにジュースを入れると、それも昴くんが受け取り、

「はい」

と隣の子のテーブルの上に乗せようとして、雑誌が乗っているのを見て、

「あ……」

と小さく声を出した。

「すみません。雑誌しまいます」

その子が慌てると、

「ああ。ゆっくりで大丈夫」

と昂くんは言いながら、心の中で、

『雑誌、俺の特集載ってるやつだ』

と私に言ってきた。

『やつぱり？』

『え？なんでやつぱり？』

『さっき、女の子たち二人の会話が聞こえてきて、昂くんのファンだって言ってたから』

『まじ？』

女の子は、雑誌を足元の鞆に押し込んだ。昂くんは、コップをテーブルに置いてあげた。

「すみません」

その女の子は多分、気づいていない。でも、その横の子が昂くんを凝視している。

『あ。気づいたかも』

『え？』

『隣の隣の子。昂くんのこと見てるよ』

『え？』

昂くんはその子の方を見ると、その子の目はみるみるでかくなり、隣の子の肩を黙ってたたき出した。

「何よ？ゆみ！痛いな〜」

「隣…」

その子はささやくように、そう言ったが丸聞こえだ。

「え？」

ゆみって子にそう言われたが、まったくその女の子は気づいていない。

「さっきの雑誌、誰か好きな俳優が載ってるんですか？」

いきなり、昴くんがその子に聞いていた。

き、聞いちゃうの？

「あ、見られちゃいました？天宮昴くんの特集で、今日出たばかりで、コンビニで買ってきたんです。ハワイに持って行くのかって、ゆみに笑われたけど、いいじゃないですかね……？昴くんのこと、ハワイで見ても……」

まだ、気づいてないらしい…。

「あ、やっぱ、俺？」

昴くんがそう言つと、ようやくそのこは昴くんの顔を見た。

「……！うひゃ……っ……！！」

その子は、両手で口を押さえ、しばらく固まった。そうだよ、そういうリアクションになるよね。いきなり隣にいたんじゃないさ…。

それから、みるみる真っ赤になり、それでもその子は固まっていた。横の子が、

「だから、言ったのに……」

と小さくつぶやいた。

「え？ゆみ、知ってたの？」

その女の子がようやく口を開いたが、返事を聞かずまたこっちを見

ると、

「ハ、ハワイ行くんですか？」

と昴くん聞いた。

「はい。新婚旅行で」

昴くんは、にっこりと微笑んで答えた。

「新婚旅行？」

その子は初めて、私の方を見た。

「あ！」

私に気づいたようだ。

「二人で、ハワイに旅行ですか？」

昴くんが聞いた。

「はい。初のボーナスで」

「へえ。そうなんすか…」

「わ〜。信じられない。横にいる」

そう言うと、その子は自分のほっぺを思い切りつねった。

「痛い！」

「だ、大丈夫ですか？」

昂くんが聞くと、

「夢じゃない」

とその子は目を潤ませた。

「わあ。本物だ〜」

「……」

昂くんはリアクションに困っていた。

「か、かつこいい〜。肌奇麗。美しい」

その子の発する言葉に、思い切り戸惑ってもいた。

『あ、照れてる?』

心で、言つと、

『うつせえやい』

と返ってきた。

「新婚旅行…なんですか？」

その横の、ゆみって子が聞いてきた。

「はい」

昴くんがまた、笑顔で答えた。

「オアフ島に行くんですか？」

ゆみって子が聞いてくる。

「いえ。俺らはマウイ島」

「な、な〜んだ」

昴くんの隣の子が、残念がった。

「私たちオアフ島だけなんですっ…。なんだ。向こうじゃ会えないですね」

「あや、なに言ってるの。新婚旅行邪魔しちゃ駄目だよ。それに今、隣にいただけで奇跡だって！」

「そ、そうだよね！」

「あやさんっていうんだ」

昴くんがそう言つと、

「はい。わ〜〜。昴くんに名前呼ばれちゃった」

と真っ赤になった。それから、しばらくそのあやっという子は、黙って前を見て、

「なんか、あの…。昂くんっていい匂いがするんですね」

と言った。

「え？俺？え？どんな？」

昂くんが慌てた。

「石鹸か…」

「石鹸？シャンプーかな？」

「あ、そうかな」

「あ、もしかして、昨日ひかりのシャンプーで俺の頭、洗った？」

いきなり、昂くんは私に聞いてきた。

「ああ…。そうかも。何も考えないで、シャンプー手にしてたから」

「……」

その会話に女の子二人は、目が点になっていた。

「あの、もしかして、ひかりさんが昂くんの髪を洗ってあげてる…、とか？」

あやさんが聞いてきた。

「うん。そうです」

昂くんはうなづいた。

『あゝ昂くん、そんなことばらさなくても』

『え？なんで恥ずかしがってんの？』

私は隣で、真っ赤になっていたようだ。

しばらく昂くんは、あやさんとゆみさんと会話をしていたが、そのうちにご飯が運ばれてきて、それも昂くんが、二人のテーブルに置いてあげたりして、あやさんは真っ赤になって、喜んでいた。

「いただきます」

昂くんは元気にそう言つと、ご飯にばくついた。元気だな…。別に高所恐怖症なわけじゃないんだよね。

『うん、離陸と着陸が苦手なだけ』

ばくつきながら、心で答えてきた。

すごいスピードで昂くんはご飯を食べ終わると、

「あ、眠くなっちゃった…」

と、あくびをした。私にご飯を食べ終わる頃には、昂くんはしっか

り寝息を立てて寝ていた。

「わ、寝ちゃった…。寝顔だ！」

と、あやさんとゆみさんが覗き込みながら、喜んでいた。

昴くんは、私の方にだんだんと頭をずらしてきて、すっかり私にもたれなかった。

『ひかり……。どこ？』

夢で探しているらしい。

『俺一人で観光しちゃうよ』

もしかしてもう、夢の中じゃハワイにいるんだろうか。

『あ！すげえ！カンガルー！』

オーストラリア？もしや…。

『わ！早くひかりもおいでよ！すごいよ。オーロラ』

どこに行ってるんだ？！

すやすや寝ている昴くんのことを、あやさんはちらちら見ていた。私は昴くんがもたれかかっているのを、どうしていいものか悩んだ挙句、そのままにしておいた。

私は、どうも眠くならなかったので起きていると、いきなり機体が

揺れだした。

「わ！何これ。すごい揺れる！」

あやさんとゆみさんが、怖がつていた。私は前にハワイに行ったときも、かなりの揺れだったから、そんなに気にならなかったけど、昂くんがその揺れを感じ取ったらしく、飛び起きた。

「何？何？なんでこんなに揺れてんの？」

ポン…。シートベルトのサインがついた。CAの人たちがいきなり、みんなにシートベルトをするよう言って回り出した。

「ひかり、なんで揺れてるの？」

「気流のせいじゃないかな？前にハワイに行ったときにもこうなっ
たよ」

「嘘！そういうのは、ハワイに行くって決める前に言ってよ！」

「怖いのか？」

「う、う、怖くないけど！」

と言いつつ私の手を握ってくる。

ガタガタガタ……。かなりの揺れとたまに、ヒュ〜って機体が下に下がる。体が浮いたようになる。

『げげ……』

昂くんを見ると、顔がかなり青い。

『大丈夫？気持ち悪いの？』

『だ、大丈夫』

『もうこうなったら、幽体離脱して、宇宙船にでも行っとく？』

『行ってもいいけど、一瞬しか時間たたないじゃん。帰ってきてても、きつとまだこの状態だよ』

確かに……。ああ、だったら、すっかり夢の中にいたらよかったのに……。

『ひかり、怖くないの？』

『うん』

『つえ~~~~！』

『そうかな？』

『だって、周り見てみなよ。真っ青だよ。隣のあやさんだって、すんげえ神妙な顔つき』

『だね……』

そして、辺り一面が黒い霧で覆われてるのに気づいた。

『昂くん、光出さなきや…』

『う、うん。わあゝゝ！またすげえ揺れた！』

昂くんからも、恐怖だか不安の黒い霧が出る。私が昂くんを、光で包み込むと、昂くんはそれに気がつき、

『サンキュー』

と力なく心で言った。

『大丈夫？』

『うん。ちょっと落ち着いた。あ、ひかり外見て』

窓から外を見ると、雲の中に入ってしまったようだったが、その雲がどんどん黒くなり、渦巻き出した。

『黒い霧？』

『なんだろう…機内もみんなが、怖がつてるけど、あの黒い霧に影響されてるのか、それともみんなの不安が呼んじゃったのか…』

昂くんは、いきなり私の手を強く握り締め、

『ひかり、愛してるよ。すんげえ、愛してるよ』

と心で言ってきて、すごい光を出し始めた。私も、同じように光を出した。二人の光が混ざり合い、周りの黒い霧を消していったが、窓の外の霧は消えなかった。

『なんでだ？光が足りないのか？』

また、機内も黒い霧で覆われた。その時、窓の外からものすごい光が飛び込んできた。目もくらむような…。

「何？太陽？」

昴くんは目を細めて、窓の外を見た。私も見てみると、その光の中にUFOが見えた。

『あ！』

私と昴くんはものすごく驚いたが、周りの人もその光に驚き、

「何？この光…」

と窓の外をみんなが見出した頃には、そのUFOは消えてしまっていた。

『あれ、もしかすると…』

『え？』

『悟さんかも』

『え?!』

『悟さんから出る光と、同じエネルギーを感じた』

『悟くんが乗ってたUFOなの?』

『悟さんの高い波動の、エネルギーかもしれないけど...』

その光で機体が包まれたあと、揺れがぴたりとおさまった。窓の外の黒い霧もまったく、消えてなくなっていた。

『あの光で浄化されたんだね...』

『うん』

シートベルトのサインのランプも消え、私と昴くんはシートベルトを外した。

「は〜。良かった」

昴くんは大きいため息をつき、また私にもたれかかってきた。

「もう少し寝る...」

そう言うと、本当にまたすぐ眠りについたようだ。相変わらずの寝つきのよさ...。

『時差ぼけになってもしらないよ』

『それは逆。今寝ておかないと、ハワイについてからがきついよ』

寝てるのに私の心の声に答えてきた。相変わらず、器用だわ...。

そして、無事ハワイに着いた。

スニーカーが出てくるのを待っていると、あやさんとゆみさんが来て、

「私たちこれで、失礼します」

と言ってきた。

「あ、旅を楽しんでくださいね」

昂くんがそう言うと、二人は握手を求めてきて、昂くんはにっこりと微笑みながら、握手をしてあげていた。

「嬉しい！ありがとうございます！」

二人は喜んで、そしてその場を立ち去った。

13 宇宙からのメッセージ

私と昴くんも飛行場をあとにした。その日だけオアフ島に滞在して、明日マウイ島に向かう。

今日、泊まるホテルに直行した。

早めにチェックインできるよう、頼んでおいて良かった。荷物をホテルの部屋に置き、夏の服に着替えると、私たちは早速、ホノルルの街に繰り出した。

「あつたかい！暑いってほどじゃないし、ちょうどいいね」

昴くんがそう言った。

「でも、海に入るのは涼しくない？」

「うん、そうかも。どうする？この辺ぶらついてみる？」

「うん」

私たちは、地図を片手に歩き出した。いろんなお店があり、空が青く、気持ちがよくって、すっかり二人してハイテンションになった。

「おみやげ買おうか！あ、これなんてお父さんにどう？このアロハ」
「！」

「派手だよ。着ないよ、こんなの…。あ！このサングラス、昴くんのお父さんにどう？」

「あはは。なんか怪しいおっさんになりそう〜」

二人で手をつなぎ、しばらくその辺のお店をぶらついた。日本人観光客も多かったが、買い物に夢中だからか、こつちを気にする人はいなかった。

買い物の途中に、ジュースを買って飲んだり、アイスを食べた。

それから、だんだんと日がかげってきて、私たちは浜辺へと移動した。

「すげえ、夕日！」

まず夕日に感動した。海の中にじゅ…って日が沈む。そのあとの空の色がものすごく奇麗だった。

青でもない。黒でもない。その中間の色。その中にやしの木があり、まるで絵に描いたような、そんな風景。

「ひかり…。なんだか、時間が止まってない？」

「うん。止まってるみたいに、感じるね」

昂くんと手をつなぎ、その美しい絵の中に自分たちも入っていった。海を見た。だんだんと星空に移り変わる空も見ていた。

「すげえ…。静かで、壮大だ…」

昂くんは天を仰ぎながら、そうつぶやいた。私も顔を空に向けた。

時が完全に止まった。

ピタ……。時間の流れが止まり、風も止まった。そこにはただただ、
広く広がる壮大な意識だけ……。

波が寄せては返すが、その波の音も遠くで聞こえるだけだった。

「……………」

昂くんも私も、頭の中が空白になった。何も考えていない。それどころか、自分という意識が消えてしまった。

『地球にいるあなたへ……』

昂くんと私の声があわさった、そして澄んでいて透明な声が、体の中から聞こえた。だした。

『あなたたちは、かけがえのない存在です』

「……高い次元の私たち？」

『私は宇宙です……』

「え？」

『完璧な存在として、あなたたちを創りました』

「……………」

昂くんの方を向くと、昂くんも私を見た。

『あなたが生まれたときから、私は見守ってきました。何をしていたても、どんなあなたでも、愛していました。そしてこれからも…』

「……」

自然と涙がこぼれていた。

『そして、あなたたちは私です』

「はい…」

そうだ…。私たちは宇宙そのもの。

『どんな存在も、例外はなく、宇宙そのものです』

「……」

『いまここに、私はいます。いつでもいます。どうぞそのことを、人々に伝え続けてください』

「はい…」

私たちは、ものすごい光に包まれていることに、その時気がついた。

『いつでも、安心して今を生きてください…。そのことも伝えてください』

「はい」

昂くんは目を閉じた。私も目を閉じた。光の中に、すっぽりと包まれているのを実感した。心地がよく、あったかかった。

目を同時に開けた。もう、光は消えていた。空には満天の星。海はすごく静かで、波の音が心地よかった。

「……」

私と昂くんは、言葉がなかった。でも、雄大で永遠で、遥かなる愛を感じて感動していた。

この地球上のすべての存在が目覚めて、自分が愛の存在だと思い出すように、私たちはこれから光を出し、そして伝えていこう……。

昂くんと同時に、そう思っていた。

昂くんと黙って、手をつないで砂浜を歩いた。心地のいい風が、優しく頬をなででいった。

夜、夕飯を終え、ホテルの部屋に戻ると、二人でバルコニーに出た。

「気持ちがいいね」

「うん」

「なんだか、不思議」

「え？」

「昂くんこうして、ハワイにいるなんて」

「だね」

「それも新婚旅行なんだよね？」

「うん」

昂くんは口数が少ない。どうしたのかわかって、エネルギーを合わせると、胸がいつぱいになっているようだった。

『なんか、嬉しいんだ。ひかりとこうして、ここにいられることが……』

『昂くん……』

昂くんがキスをしてきた。

『あ、こんなところでしてたら、写真撮られちゃうかな？』

昂くんはそう言って、くすって笑った。

それから、先に私がシャワーを浴び髪を乾かしている間に、昂くんがシャワーを浴びに行った。

『ひかり、先寝たら駄目だよ』

『なんで？』

『Hできないじゃん』

『Hって言うなっば』

バスタオルを頭に乗せ、はぶらしを口につっこみ、昂くんはバスルームから出てきた。私はほとんど髪が乾いたので、ベッドに潜り込んだ。

「ひかり？寝ちゃうの？」

「うゝん。もう、限界かも。眠いよ…」

「だから、飛行機で寝たら良かったのに」

「あんなに短い時間じゃ、寝れないよ。昂くんはほんと、寝付きいいしどこでも寝れるよね」

「じゃなきゃ、芸能界で生きていけないって…。移動時間にどれだけ寝れるかが勝負なんだよ」

「……」

「ひかり？」

遠くに昂くんの声が聞こえた。どうやら私は、話の途中で寝てしまったようだ。

夢の中で満天の星空の下に、私はいた。しばらくして、昂くんが隣に来了。そしてそっと、私を抱きしめた。

「待ってた？」

「うん。すぐに昴くんも寝たでしょ？」

「うん。髪、半分乾かしてる間に、眠くなっちゃった」

「ベッドに倒れこんで、ボタンキュー？」

「うん。ひかりの隣に潜り込んで、ひつついて寝た」

「え？私のベッド？狭くない？」

「ちょっと狭い」

あはは……。もう……。またベッドから落ちるんじゃないの？

二人で、星空をずっと眺めた。

「あの声、心に響いたね」

「うん。感動した」

今日聞いた、宇宙のメッセージを思い出した。そして、昴くんは満天の星空の下、私を押し倒して、キスをしてきた。

「夢の中なら、大丈夫でしょ？寝たりしないよね？」

「くす……。うん」

昴くんは、ちょっと強引。夢の中じゃ、ワールドにもなる。

ドスン！

「いたた…。あ…」

私がベッドから落ちていた。隣で昴くんはぐーすか寝てるけど、

『ひかり?!』

と、どうやら、夢の中からいきなり私が消えたんで、驚いてるようだ。

「あゝあ…。夢に昴くん一人、おいてきちゃった」

また、ベッドに潜り込み、昴くんの胸に顔をうずめて、すぐに眠りについた。

「ひかり！何してるんだよ？いきなり消えたからびっくりした」

「ベッドから落ちて、目が覚めちゃった」

「ええ？ひかりの方がベッドから落ちたの？あはははは」

もう、そんなに笑うな…。

「さ。続きね！」

え？……。昴くんはまた、私に抱きついてきた。そして満天の星空の下で、抱き合った。

翌朝、早くに起きて朝食を取り、飛行機に乗りマウイ島に向かった。
マウイ島のホテルに着くと、ホテルには大きなプールもあり、豪華
だった。

でも、肌寒くて、入れそうもなかった。

私たちは、自然を満喫した。緑、空、海、景色だけでも満足だった。
太陽、雲、風、すべてが気持ちいい。

すべてから、愛のエネルギーを感じ取れた。

「宇宙の愛を感じるね…」

「うん」

「このすばらしい景色、これも全部、自分なんだよね」

「うん……」

昴くんの言葉に、私はうなづいた。

部屋に戻ると、昴くんは持ってきた小さなパソコンを開いた。マウ
イで撮った写真をブログにアップして、

> 今、ハワイに新婚旅行で来ています。

と、コメントも載せた。

> 自然がものすごく綺麗で、感動です。空も雲も、太陽も、木も、風も、緑も、それらすべてから、エネルギーを感じます。この宇宙のすべてが、一つの大きな命で出来ている…。そんな感じがしています。

昴くんはブログに、そう書いていた。

私も、昴くんのパソコンを借りて、自分のブログにメッセージを書いた。

> 私は、宇宙です。みんな、私が創った完璧で、かけがえのない存在です。例外など一人もいません。すべての人が、すべての命が、大事で貴重で、素晴らしい命です。

> そしてあなたたちは、私です。すべての存在はつながっていて、すべてが私なのです。

> 私はいつでも、あなたを愛しています。生まれたときから、あなたのそばをかたときも離れたことはありません。いつも、いまここで、あなたを見守ってきました。

> あなたはひとりでは在りません。この宇宙すべてがあなたとつながっているのです。

> あなたは、壮大で、完璧な存在です。あなたは、宇宙そのものなのですから。

> どんなことも、創造できる神でもあるのです。

> 存在そのものが素晴らしい。何かになろうとしなくても、もうす

でに完璧なのですから。

>そのままのあなたでいてください。変わろうとしなくても、いいのです。あなたがあなたでいるとき、完璧なのです。

>どうぞ、いまに戻ってきてください。そこには、いつも私がいます。そして私はあなたなのです。

>素晴らしい、いまここを楽しんでください。

>宇宙を信じてください。もうこのままで、完璧なのです。

それは何も考えなくても、手が勝手にキーボードを押していた。

きっと、私を通しての、宇宙からのメッセージだったんだろう。

最後に、

>宇宙より、あなたへ

と書き加え、更新した。

「宇宙のメッセージそのものだね」

「うん」

「これも、ミッションだね」

「うん」

昂くんは後ろから、ぎゅって抱きしめてきた。

2010年がもうすぐ、終わろうとしている。

2011年はもっと、多くの人が目覚めるだろう。

自分が本当は、宇宙そのもので、すべてはつながっていると。自分は愛と光の存在なのだということを、思い出さだろう。

そして、現実だと思っていたものは、幻想であり、本当の自分は、それを創造していた神だったということも。

自分だと思い込んでいた自分すら、幻想の産物だったということも…。

それを思い出したうえで、この地球で、素晴らしい今を、一瞬一瞬を送っていくのだろう。

愛と光の存在で……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9270k/>

2010年 ひかりと昴（2012年愛と光へ 番外編）

2010年10月8日13時21分発行